

中 南 部 9

－大橋 E 遺跡第 10 次調査報告、横手遺跡群第 1 次調査報告－

2008
福岡市教育委員会

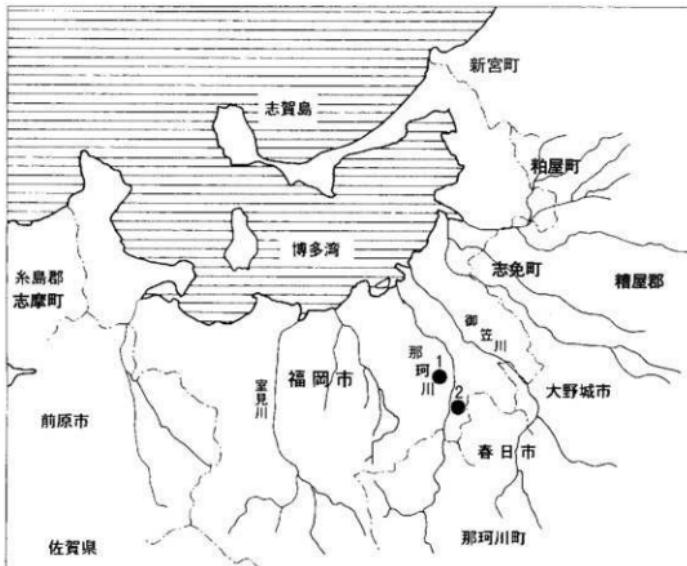
「中南部9」報告書正誤表 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1015集

頁	行	誤	正
例言		(10) 土層・遺物の色調の記録	(10) 土層・遺物の色調の記述
挿図目次		図7 SD09-11-19出土遺物(1/3)	図7 SD09-11-13-19-21出土遺物(1/3)
8		図7 SD09-11-19出土遺物(1/3)	図7 SD09-11-13-19-21出土遺物(1/3)

NO. 6493 X

ちゅうなんぶ
中南部 9

- 大橋 E 遺跡第 10 次調査報告、横手遺跡群第 1 次調査報告 -



1. 大橋 E 遺跡第10次調査 0366 OHE-10
2. 横手遺跡群第1次調査 0430 YKT-1

2008

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄してきた地域で、市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。

また南区は都市基盤整備が進み、西日本鉄道大牟田線沿線を中心に市街化が進んでいる地域ですが、弥生時代から古墳時代集落である井尻遺跡群や国史跡の老司古墳、大宰府觀世音寺の瓦を焼いた老司瓦窯跡などの貴重な遺跡が残っています。

今回の報告は、平成15年度と16年度に実施した大橋 E 遺跡第10次調査と横手遺跡群第1次調査のもので、個人住宅建設に伴って国から国庫補助金を受けて実施したものです。大橋 E 遺跡の調査では中世後期から近世の屋敷跡、横手遺跡群の調査では弥生時代前期と古墳時代後期から中世前期の集落からなる2面の遺構を調査しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、申請者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成15・16年度に福岡市南区大橋4丁目11-22と同区横手3丁目273番6で国庫補助金を受けて調査を実施した発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行なわれ、調査の担当は山崎龍雄が行なった。
- (3) 遺構実測と遺物の実測は山崎が行ない、横手遺跡群第1次調査の遺物実測については一部、境聰子の協力を受けた。
- (4) 本書に使用した図面の済書は山崎が行なった。
- (5) 遺構・出土遺物の撮影は山崎が行なった。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (7) 本文で使用した「那珂郡三宅郷古野城址之図」については所蔵元の独立行政法人国立公文書館の許可を受けて掲載した。
- (8) 本書で使用した航空写真（昭和23年撮影）については国土地理院から購入したものを使用した。
- (9) 本書図2・18の調査区位置図は平成5年3月作成の「福岡市文化財分布地図 中部・南部」を使用した。
- (10) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (11) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (12) 本書の執筆・編集は山崎が行なった。

大橋E遺跡第10次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	文化財分布地図
OHE-10	0366	福岡市南区大橋 4丁目11-22	733.88m ²	233m ²	個人専用住宅	2004.2.2～ 04.2.27	山崎龍雄	三宅39

横手遺跡群第1次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	文化財分布地図
YKT-1	0430	福岡市南区横手 3丁目273番6	259.94m ²	103m ²	個人専用住宅	2004.6.18 ～04.7.13	山崎龍雄	三宅39、井戸25

本文目次

I 大橋E 遺跡第10次調査	頁
第I章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	2
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1 遺跡の立地と歴史的環境	2
第III章 調査の記録	3
1 調査の概要	3
2 遺構と遺物	3
3 まとめ	17
II 横手遺跡群第1次調査	
第I章 はじめに	25
1 調査に至る経過	25
2 調査の組織	26
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	26
1 遺跡の立地と歴史的環境	26
第III章 調査の記録	27
1 調査の概要	27
2 第1面の調査	27
3 第2面の調査	35
4 まとめ	36

挿図目次

図1 大橋E 遺跡・横手遺跡群周辺遺跡分布図 (1/50,000)	ii
図2 大橋E 遺跡調査区位置図 (1/5,000)	1
図3 調査区全体図 (1/150)	4
図4 各溝土層図 (1/60)	5
図5 SD19 (1/60)	6
図6 SD06・09出土遺物 (1/3)	7
図7 SD09・11・19出土遺物 (1/3)	8
図8 SD19出土遺物 (1/3)	9
図9 SE05・SX01・20・24・28・29出土遺物 (1/3)	10
図10 SX03出土遺物① (1/3)	13
図11 SX03出土遺物② (1/3・1/4)	14
図12 SX03出土遺物③ (1/3・1/4)	15
図13 ピット出土遺物 (1/3・1/4)	16
図14 大橋E 遺跡調査区配置図 (1/1,500)	18
図15 大橋E 遺跡周辺旧地形図 (1/5,000)	19
図16 第10次調査区周辺地籍図 (1/2,500)	19
図17 那珂郡三宅 都 古野城址之図 (大倉種周)	
図18 横手遺跡群調査区位置図 (1/6,000)	25
図19 横手遺跡群旧地形図 (1/5,000)	28
図20 第1次地点調査区 (1/300)	28
図21 第1・2面遺構配置図 (1/100)	29
図22 調査区北壁土層図 (1/60)	30
図23 SD09・12土層図・SK04 (1/40)	31
図24 第1面各溝出土遺物 (1/3・1/4)	32
図25 SK05・11 (1/30・1/40)	33
図26 第1面各土坑出土遺物 (1/3・1/4)	34
図27 第1面各遺構出土遺物 (1/3)	35
図28 第2面各遺構出土遺物 (1/3)	36
図29 各遺構出土石器 (2/3・1/2・1/3)	37

図版目次

写真1 大橋周辺航空写真（昭和23年撮影）	21	写真12 SD06（南から）	39
写真2 調査区全景（西から）	22	写真13 第1面調査区西側（西から）	40
写真3 調査区東側Ⅰ区全景（北から）	22	写真14 SK05（東から）	40
写真4 調査区西側Ⅱ区全景（北から）	23	写真15 SK04（南東から）	40
写真5 SD06・09・11（北から）	23	写真16 SD12遺物出土状況（北東から）	40
写真6 SD19・21（北から）	23	写真17 SK11（南から）	40
写真7 SD19北壁土層（南から）	24	写真18 第2面調査区東側（南から）	41
写真8 各遺構出土遺物（縮尺不統一）	24	写真19 第2面調査区西側（南から）	41
写真9 調査区遠景（西から）	38	写真20 調査区北壁土層（南から）	42
写真10 第1面調査区東側（西から）	38	写真21 各遺構出土遺物（縮尺不統一）	42
写真11 SD01・02（南から）	39		

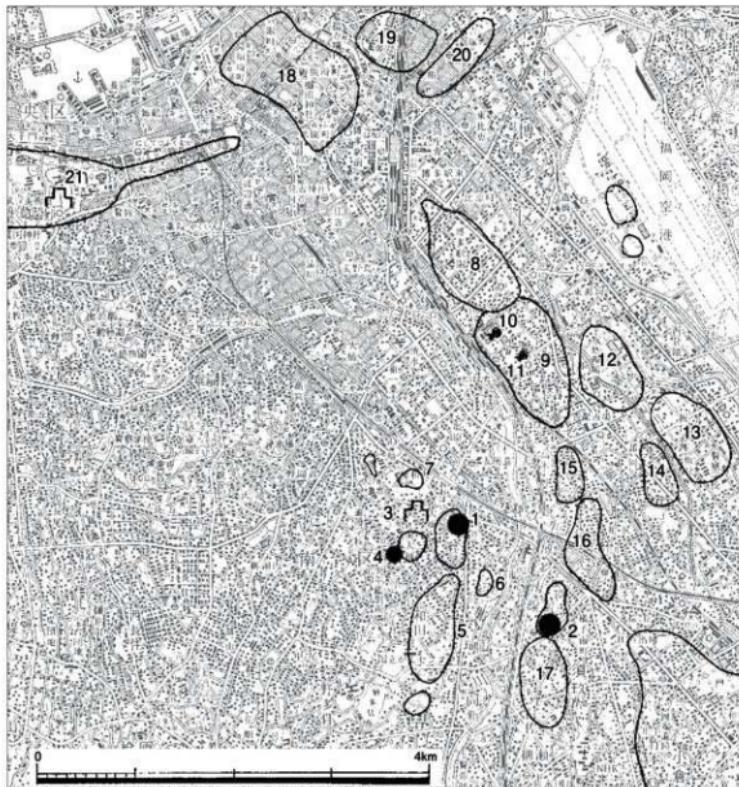


図1 大橋E遺跡・横手遺跡群周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 大橋E道路 2. 横手道路群 3. 古野城跡 4. 三宅廢寺・三宅A道路 5. 三宅B道路 6. 三宅C道路 7. 野間B道路
8. 比恵道路群 9. 那珂道路群 10. 刺塚古墳 11. 那珂八幡古墳 12. 那珂君体道路群 13. 板付道路 14. 諸岡B道路
15. 五十川道路 16. 井尻B道路 17. 曰佐遺跡群 18. 博多道路群 19. 堅船遺跡群 20. 吉塚道路群
21. 福岡城跡

I 大橋E遺跡第10次調査

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成15（2003）年11月7日に地権者の中西芳博氏より、福岡市南区大橋4丁目11-22における個人専用住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願（事前審査受付番号15-2-735）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は大橋E遺跡地内に所在するため、埋蔵文化財課は事前の試掘調査を行ない、埋蔵文化財を確認した。その結果予定建築物の基礎工事によって地下の遺構が破壊されることから、記録保存の調査が必要であるとして、国庫補助金を受けて、建物建設予定部分を対象に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成16年2月2日から平成16年2月27日迄行なった。調査実施面積は申請面積733.88m²中の233m²である。また報告書作成作業は平成19年度に実施した。

調査にあたっては、地権者及び工事関係の方々に協力を受けた。記して感謝の意を表します。

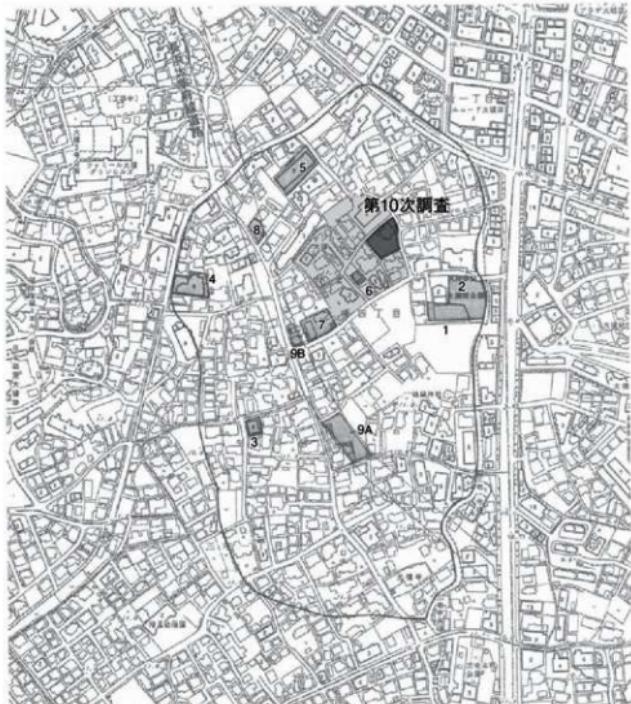


図2 大橋E遺跡調査区位置図 (1/5,000)

(三宅39)

2. 調査の組織

平成15年度調査・19年度整理の関係者は以下のとおりである。

【平成15年度】

調査委託者	中西芳博	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財課長	山口譲治
庶務担当	埋蔵文化財課調査第2係長	田中寿夫
	文化財整備課管理係	御手洗 清
事前審査担当	埋蔵文化財課事前審査係	久住猛雄
調査担当	同 調査第2係主任文化財主事	山崎龍雄
調査作業	井上一雄、井上利弘、井上英子、大橋由美子、岡部安正、北原由紀子、佐藤アイ子、堤正子、別府俊美	

【平成19年度】

整理総括	文化財部埋蔵文化財第2課長	力武卓治
庶務担当	埋蔵文化財第2課調査第1係長	杉山富雄
	文化財管理課管理係	鈴木由喜
整理担当	埋蔵文化財第2課調査第1係主任文化財主事	山崎龍雄
整理作業	井上朝美、木藤直子	

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境（図1・14）

大橋E遺跡は南区大橋4丁目から三宅1丁目一帯に所在する遺跡である。遺跡は福岡市の中央部を南北に貫流する那珂川の西約500m離れた所に位置する。遺跡のすぐ東側は那珂川の支流の老司川が流れ、西側は油山山塊から派生する標高30m程の低丘陵がある。遺跡はこの間に挟まれた沖積微高地土に立地する。現在は住宅が建て込んだ市街地となっているが、戦前の地図を見ると、調査地一帯は民家または畠地で、その周囲は水田となっている。

大橋E遺跡が所在する大橋地区は、福岡市合併前は筑紫郡三宅村であり、それ以前は那珂郡に属す。三宅村はもともと三宅、古野、堂の原、矢台の4カ所の集落から構成され、古代の『和名類從抄』にある那珂郡三宅郷であり、その三宅の地名の由来は『日本書記』の「宣化天皇の御代に此の地に屯倉を建て、(以下略)」という記述から由来する。また『筑前國續風土記』「古城古戰場」の部に三宅村に古野古城という山城があったという記述がある。調査地が所在する矢台地区の地名は、矢を射かける台があった所という。周辺に分布する遺跡では、周間に大橋A～D遺跡があるが、調査が進んでおらず詳細は不明。北西側には野間A・B遺跡があり、野間B遺跡では古墳時代後期古墳2基と、その下に弥生時代中期前半の住居跡が調査されている。南西側には三宅廐寺跡、三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡などがあり、三宅廐寺跡では古代寺院の一部が調査されている。南側には和田A・B遺跡、野田目A・C遺跡などが存在し、野田目A・C遺跡では縄文時代から中世の集落が調査されている。

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要 (図2・3、写真1~3)

本調査区は大橋E遺跡の北側中央部に位置する。那珂川の支流老司川の左岸、標高11mを測る沖積微高地に立地する。調査は予定建物範囲全域について実施したが、排土が場内処理のため、調査区を東西二分割して実施した。遺構面までの土層は表土0.2m、黒褐色粗砂混じり土0.2~0.3mである。遺構面は黄褐色砂(2.5YR5/4)で、調査は重機でこの遺構面まで掘り下げる実施した。検出遺構は旧家屋による搅乱がひどく、遺構としては中世~近世後半にかけての時期のものを検出した。検出した主な遺構は溝、井戸、土坑、ピットなどである。

2. 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

SD06 (図4、写真5)

調査区東側で検出した弧状に湾曲して延びる南北溝で、南側でSD09・SD11に切られる。北側にはSD07・08がある。確認規模は長さ約10m、溝幅は0.8~1.2m、深さ0.2~0.6mを測る。南壁に近いほど深くなる。溝壁は緩やかである。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (図6) 近世の陶磁器、中世の土師器、黒色土器、青磁などの細片が少量出土。量としては近世の遺物は少ない。**1**は染付碗で、口径10cm、器高4.7cmを測る。灰白色の体部外面に水草のような草花を描き、やや青みがかった透明釉をかける。疊付は釉の搔き取り。肥前系磁器であり、19世紀中頃のもの。

SD07

SD06から0.3m程離れて北側に延びる小溝。途中で北西方向にSD08が分岐する。確認規模は長さ4.5m、幅0.7~1.0m、最大深さ0.2mなどを測る。埋土は黒灰色で、炭化物・焼土を含む。溝幅は一定でなく、また底面は凹凸が激しく、調査時の所見では屋敷地周囲の生け垣のような感じを受けた。出土遺物は近世後期以降の陶磁器、石炭殻などがごく少量出土。

SD08

SD07から西に分岐して北に延びる小溝。確認規模は長さ2.5m、幅0.25~0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土はSD07とは同じである。出土遺物は近世以降の土器細片が少量出土。

SD09 (図4、写真5)

調査区中央南側で検出したSD11を切る溝で、調査区中央部で立ち上がる。確認規模は長さ7m、幅は南壁で約2m、深さ0.5mを測る。埋土はオリーブ黒色土が主体で、上層には炭化物・石炭殻・礫石・瓦片などを含む。この上面にはSX03として番号を付した搅乱が入っていた。この遺構は近世後期以降の遺物を含み、SD09の遺物として上げたものにも混在する。

出土遺物 (図6・7、写真8) 近世以降の国産陶磁器、日常雑器などが出土。

2~10は染付磁器で肥前産と思われる。**2~4**は碗。**2**は1/2片で、口径10.6cm、器高5.5cmを測る。外面吳須で帆掛け船などの海浜風景を描き、くすんだ透明釉がかかる。**3**は1/2片で、復元口径9.2cm、器高5.5cmを測る。外面吳須で蛸唐草文を描き、やや青みがかった透明釉がかかる。**4**は湯呑み碗1/2片。口径7.6cm、器高5.7cmを測る。外面には吳須で飛ぶ鳥と葉を描く。吳須の発色は良い。いずれも19世紀中頃のもの。**5・6**は皿。**5**は底部1/2片。復元底径7.7cmを測る。素地に白化粧土を掛けた後、見込みに吳須で縁を描き、施釉している。文様は緋色を呈し、発色は良い。疊付は露胎。蛇の目凹型

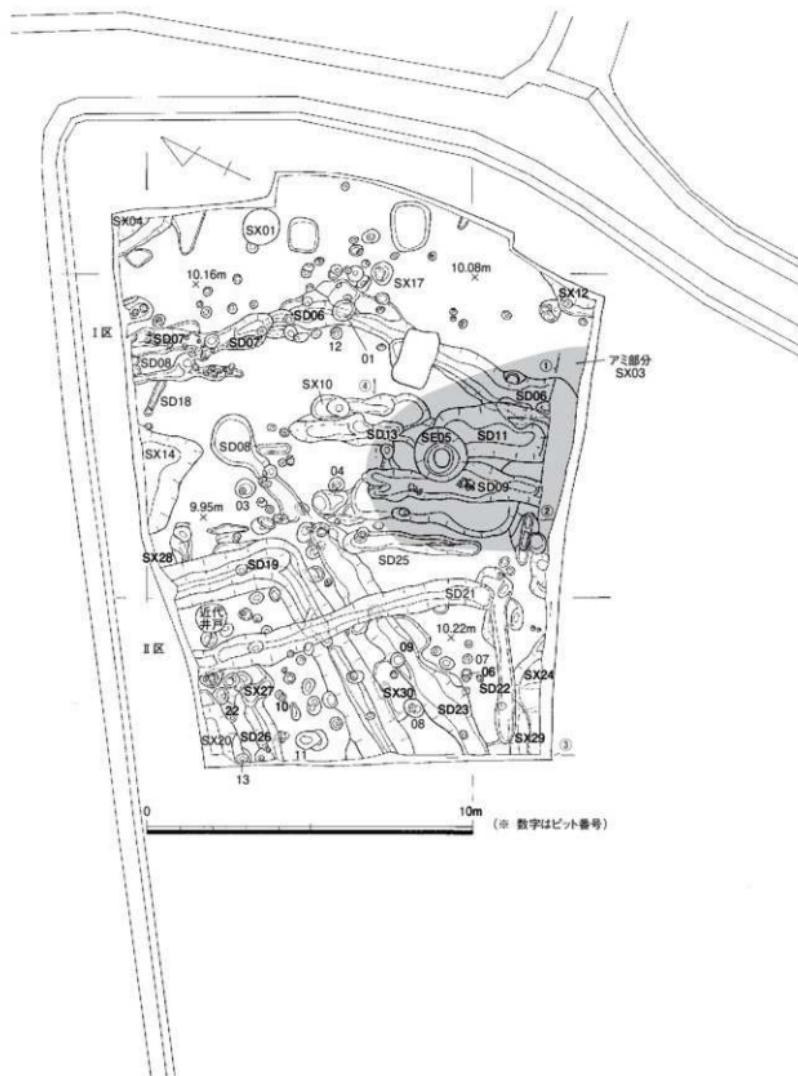


図3 調査区全体図 (1/150)

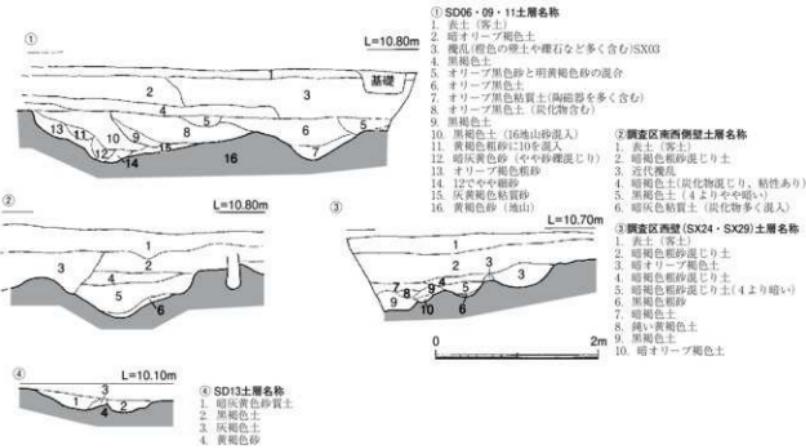


図4 各溝土層図 (1/60)

高台で18世紀末～19世紀中頃のもの。6は口縁が端反りの白磁皿1/2片。復元口径14.0cm、器高3.7cmを測る。灰白色の素地に光沢のある透明釉がかかる。見込みは蛇の目釉剥ぎし、剥いた部分にはアルミニナ珪石粉を塗り、浅黄色を呈し、重ね焼きの痕跡を残す。豊付は露胎。7は蛇の目凹型高台の鉢底部片。底径8.0cmを測る。体部外表面の文様は濃みで輪郭は滲んでぼけ、見込みには蕉を描く。蛇ノ目部は露胎。8は蓋1/3片。復元口径10.6cm、器高3.6cmを測る。天井部外面は菊唐草、内面は團線がある。呉須の発色は良く、暗青色を呈す。9は仏飯器1/2弱片。口径6.0cm、器高5.5cmを測る。坏部外面は蛸唐草を描き、底部は露胎で蛇ノ目状にケズり込む。18世紀のもの。10は白磁の瓶、徳利である。破片から復元した。口は嘴状に尖り、注口となる。内外面光沢を持つ透明釉がかかるが外底部は露胎。体部には鉄漿で文字が描かれる。11～17は陶器。11は肥前陶器のひょうそく1/2片。口径5.3cm、器高3.1cmを測る。口縁から受皿は褐色の鉄釉がかかる。皿部から底部は回転ナデで、外底は回転糸切り。18世紀代のもの。12～15は土瓶。12は土瓶の蓋。蓋径9.4cmを測る。天井部が凹型を呈し、中央部に摘みが付く。天井部外面は黒褐色の鉄釉が、また周りにオリーブ灰色の蘆灰釉がかかる。内面は無釉で底部は回転糸切り。小石原焼で18後半～19世紀中頃のもの。13は土瓶で、破片からの復元である。底部は基筒底で、注口部は欠損する。口縁部両側に弦目の耳が前後に付く。口径7.6cm、器高10.5cmを測る。体部上半に凹線を多数巡らし、中央には4～5カ所草のような陰刻文様がある。口縁部には黒褐色の鉄釉、体部外表面にはオリーブ灰色の蘆灰釉がかかり、外面下半から底部は無釉で、ススが付着する。12とセットと思われる。14は算盤形の胴部に円錐状の足が3カ所付く形態。破片から復元。復元口径8.8cm、器高9.5cmを測る。褐色の胎土で、外面上半部から内面には暗褐色釉がかかる。体部下半は無釉で、ススが付着する。19世紀の肥前陶器か。15は球形の体部を呈す形態で、破片から復元。口径5.4cm、器高9.3cmを測る。極めの細かい胎土に、外面は黒褐色の鉄釉がかかり、口縁内面は黒褐色釉、下半から底部は灰黄色釉がかかる。注口が付き、内面には孔が3カ所開く。16は仏花瓶で底部1/2を欠く。口径5.8cm、器高12.6cmを測る。体部下半は飾による沈線が入る。口縁下には一対の耳がつく。外面は黒褐色の鉄釉がかかり、内面は無釉で素地は暗褐色を呈す。17は小型の片口の描鉢ではほぼ完存。口径26.4cm、器高11.15cmを測る。橙色の精良な胎土の素地に内外黒褐色釉が薄

調査区北壁 SD19・21土層名称

1. 黄土（客土）
2. 明灰黄色土（炭化物混入）
3. 明灰黃褐色粘泥じり土
4. 明灰黄色粘質土
5. 3に黄色色細糸混入
6. 明灰黄色粘質土
7. 明灰黄色土（粘性あり）
8. 黒褐色粘土ブロックと明灰黄色粘質土ブロックの混合
9. 明灰黄色粘土ブロックと黒褐色粘質土ブロックの混合
10. 明灰黄色粘質土（酸化鉄分・炭化物混入）
11. 明灰黄色粘質土（酸化鉄分・炭化物混入）
12. 明灰黄色粘質土
13. 明灰黃褐色土
14. 黑褐色粘土
15. 从青灰色粘質土（地山の汚れの可能性あり）
16. 从灰黄色粘質土
17. 黄褐色砂

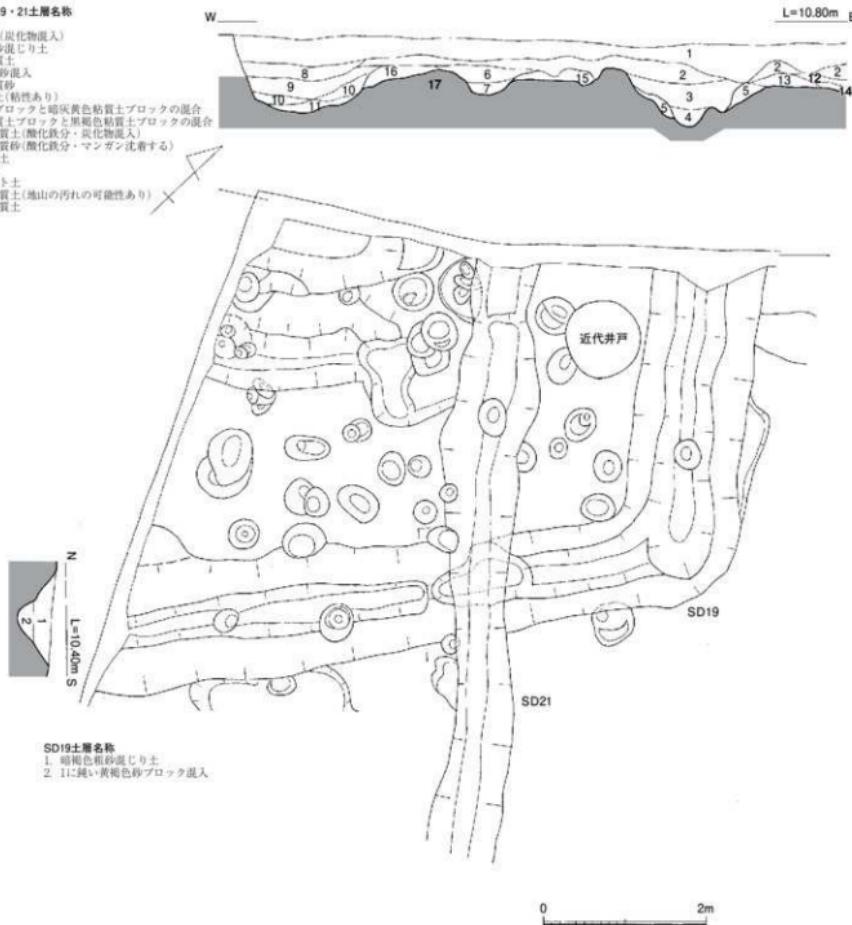


図 5 SD19 (1/60)

めにかかる。内面幅2.5cm、単位11本ほどの掘り目が密に施される。豊付きは軸の搔き取りか、剥げている。

SD11 (図4、写真5)

SD09の東側で検出した溝で、SD06を切り、SD09に切られる溝。途中で立ち上がり、先端は井戸SE05に切られる。確認長3.5mで、南壁で幅1.8m以上、深さ0.4mを測る。埋土はオリーブ黒色土で、炭化物、石炭殻を含む。この溝上面は搅乱 (SX03) を受ける。



図6 SD06・09出土遺物（1/3）

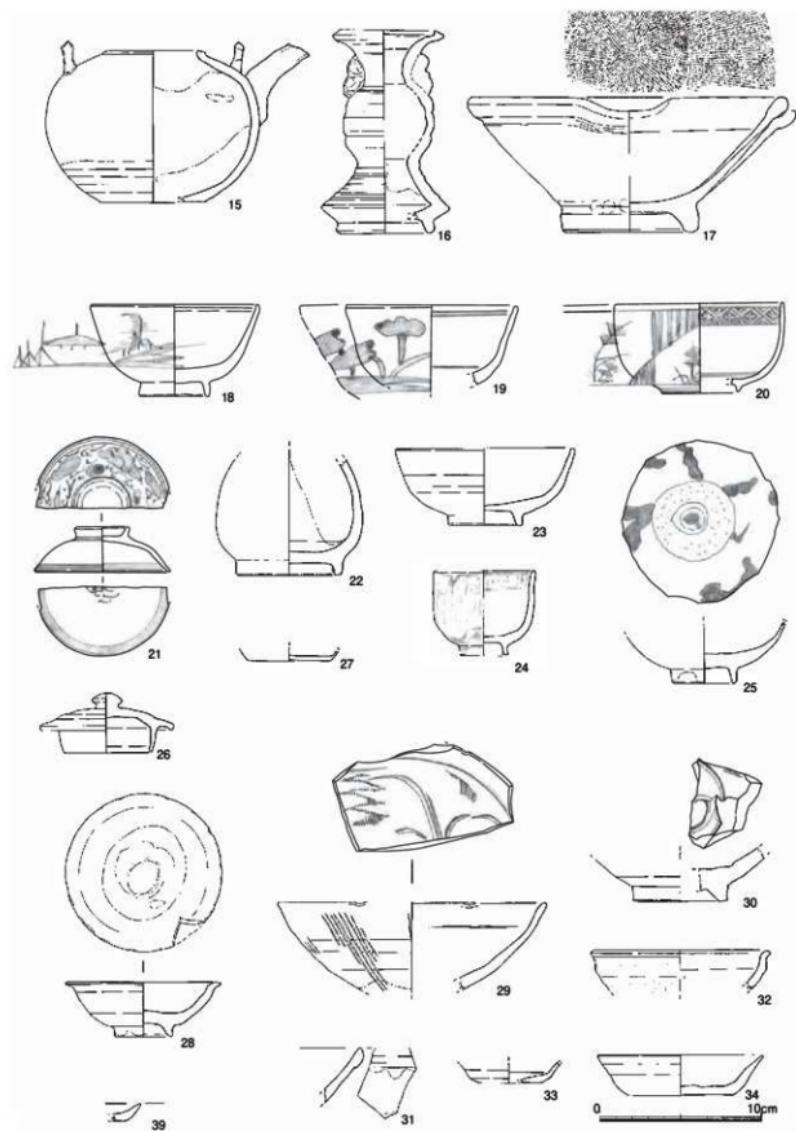


図7 SD09 · 11 · 19出土遺物（1/3）

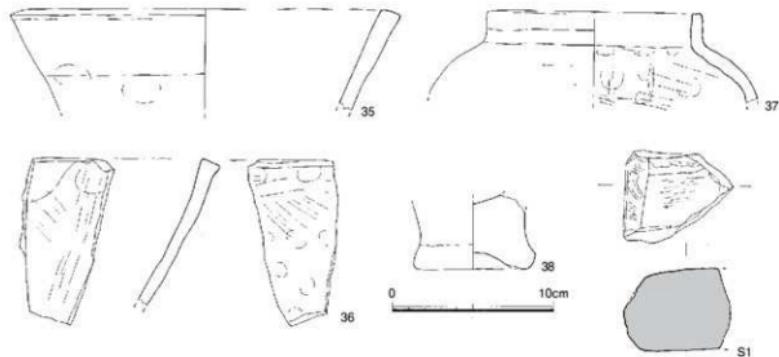


図 8 SD19出土遺物 (1/3)

出土遺物 (図 7、写真 8) 近世後期以降の陶磁器や、日常雑器、中世の中国産青磁碗などが出土。

18~21は染付磁器。18~20は碗。18は口径10.4cm、器高5.6cmを測る。体部外面呉須で網干、建物、樹木などを描くが、釉の発色は悪い。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。豊付きは露胎。19は1/4片で、復元口径10.7cmを測る。体部外面草花を呉須で描くが、発色は悪く、やや暗味を呈す。素地は灰色を呈し、やや暗い。20は口径10.2cm、器高5.5cmを呈す。体部外面は水草と日足文、内面は四方擗文を呉須で描く。豊付は露胎。18世紀末~19世紀前半の肥前磁器。21は蓋1/2片。口径8.4cm、器高2.75cmを測る。天井部外面は花卉文、内面は帶線を呉須で描く。呉須の発色はやや暗い。豊付は露胎。19世紀前半~中頃の肥前磁器か。22は青磁の瓶底部で底径6.4cmを測る。高台内は砂が付着し、豊付は露胎。体部内面と高台内は一部無釉。明オリーブ灰色を呈す釉は厚くかかり、大きな貫入が入る。18世紀末~19世紀にかけての肥前磁器か。23~26は陶器。23・24は碗。23は口径11.0cm、器高4.6cmを測る。鈍い黄橙色を呈す釉がかかるが、見込みと豊付は露胎。24は体部が丸味を持って立ち上がる小碗。口径6.3cm、器高5.2cmを測る。赤褐色の素地に褐色釉の上に分厚く海鼠釉を二重掛けする。黒・白・褐色が混ざる。高台豊付は露胎で、その内側に重ね焼きの痕跡がある。25は皿底部で高台径4.0cmを測る。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎし、その部分にアルミニナ珪石粉を塗り、重ね焼きする。褐灰色の素地に褐色釉を掛けたが、黒が混じり光沢がある。26は土瓶の蓋。口径5.4cm、器高3.6cmを測る。天井部外面は鉄釉がかかり、口縁部は無釉。素地は暗褐色を呈す。19世紀の肥前陶器。27は土師器小皿で口縁部を欠損する。底径5.2cmを測る。外底部は回転糸切り、体部から内面はナデ。胎土は精良、色調は鈍い橙色を呈す。

SD13 (図 4)

SD11の北側で確認した溝で、攪乱 SX03 や SE05 に切られる。確認長4.5m、幅1.2~1.5m、深さ0.2m前後を測る。埋土は暗灰黄色砂質土から黑灰土で、酸化鉄分を含む。形状が複雑であり、複数の遺構 (SX10) などが重なっているものと思われる。

出土遺物 (図 7) 近世の陶磁器、土器の細片が少量出土している。28はほぼ完存の白磁小皿。口径9.8cm、器高3.4cmを測る。口縁が端反りで、全面縁がかった灰色の釉が厚めにかかるが、見込みは蛇の目釉剥ぎする。豊付は露胎。胎土は灰白色で微粒の黒色粒子を含む。

SD19 (図 5、写真 6・7)

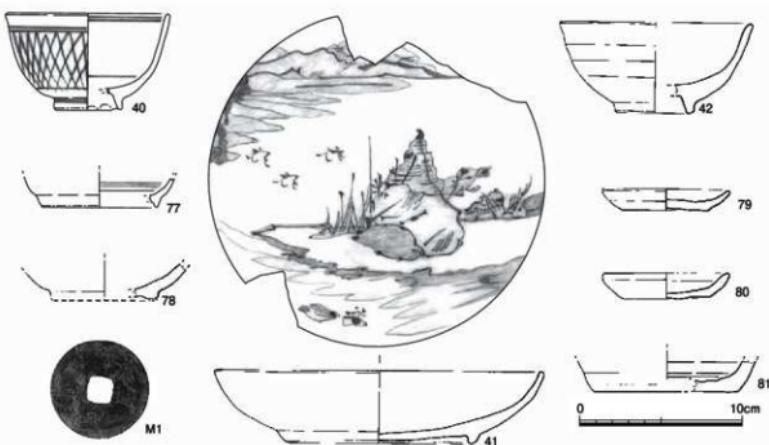


図9 SE05・SX01・20・24・28・29出土遺物(1/3)

調査区北西側で検出した北西から南西へ、直角に曲がる溝。確認規模は南北4.5m、東西8m、幅1.1~1.5m、深さは0.45~0.7mを測る。溝断面は逆三角形形状を呈す。埋土は上二層に分かれ、上層は暗灰黄褐色~暗褐色粗砂混じり土、下層は暗灰黄色粘質土で、ややグライ化した部分もある。北壁土層では溝壁両側に酸化鉄分が沈着し、埋土からの汚染もあって汚れる。溝底のレベルは南西側より北西側が低くなる。屋敷地の区画溝のコーナーであろう。

出土遺物(図7・8、写真8) 弥生土器、須恵器、中世の土師器、瓦質土器、中国産陶器、砥石などが出土している。**29・30**は青磁碗。**29**は同安窯系の口縁1/4片。復元口径16.6cmを測る。口縁部には輪花状を呈すような切り込みがあるが、小片で不明。見込みは櫛描きと片切り文様で、外面は櫛による条線が入る。灰色の素地に光沢を持った透明な灰オリーブ釉がかかる。表面は大きな氷裂が入る。**30**は竜泉窯系の底部1/4片で、高台径5.8cmを測る。見込みに團沈線と片彫り文様が入る。体部内面は透明感のあるオリーブ釉がかかるが、外面は無釉。胎土は灰白色を呈し、微粒の黒色粒子を含む。**31**は玉環の白磁碗の口縁部細片。口縁部外面から内面にかけて灰白色的釉が厚めにかかる。胎土は灰白色を呈し、空隙が多い。**32**は天目茶碗口縁部1/7片。復元口径10.8cmを測る。釉色は内外面黒色の釉がかかるが、口縁部は鈍い黄褐色を呈すなど、橙色から肌色の変化が現れる。器壁はやや厚手で、国産の可能性がある。**33・34**は土師器。**33**は小皿底部1/2片で、底径3.9cmを測る。全体に磨滅するが、外底部は回転糸切り。色調は淡橙色~鈍い黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。**34**は皿で4点の破片から復元。口径10.2cm、器高2.5cmを測る。体部の調整は回転ヨコナデ、外底部は回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は精良で、微量の金雲母、赤褐色粒子を含む。**35・36**は土師質土器の鍋。**35**は口縁部小片で、復元口径24cmを測る。器表の磨滅はひどく、調整は不明。外面ススが付着する。色調は明褐色を呈し、胎土は精良で、微量の白色粒子・黒色粒子・雲母粒子・赤褐色粒子を含む。焼成は良い。**36**は細片で、調整は、外面は口縁部ヨコナデ、体部はハケ目後ナデ、内面は板ナデ。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は精良で、微量の黒色粒子・雲母粒子を含む。**37**は土師質土器湯釜の口縁部1/5片。復元口径13.2cmを測る。口唇部には凹線が巡る。調整は、口縁部内外面

はナデ。胴部は板ナデで、内面には指押え痕が残る。胴部外面にはススが付着する。**38**は弥生土器壺底部。底径7.3cmを測る。上げ底の底部で、調整は摩滅がひどく不明。中期前半のもの。**S1**は砥石片。5.7×6.7cm、厚さ5.1cmを測る。灰黄色を呈す砂岩で粒子が細かく緻密。上下、左側面が砥面。**30・31・32・34・38・S1**は上層、**29・33・36**は下層。

SD21 (図4、写真6)

調査区西側で検出したSD19を切る主軸西を振る南北溝で、南側で東西溝SD22と直交する。確認規模は長さ9.5m、幅0.8~1.2m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は上下2層に分かれ。上層は暗灰黄色から暗褐色砂質土、下層は暗褐色で、地山の黄褐色砂を混入する。SD19とはほぼ同じ。

出土遺物(図7) 土師器、須恵器、中世の土師器、瓦器の細片が少量出土。**39**は土師器小皿の細片。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は精良。

SD22

SD21と直交する東西溝で、SD21よりは古い。確認規模は長さ5.5m、幅0.4~0.6m、深さは0.15mを測る。埋土は黒褐色粗砂混じり砂質土。**出土遺物**は古代から中世土師器片が少量出土したが、細片で図示出来ない。

SD23

北東方向に延びる溝で、確認規模は長さ9.5m、幅0.8~1.4m、深さは0.3m前後を測る。埋土は暗褐色から暗オリーブ褐色粗砂混じり土を主体とする。**出土遺物**は古代頃と思われる土師器・須恵器片が少量出土したが、細片で図示出来ない。

SD25 SD21の東側で検出したSD23を切る小溝。確認規模は全長4.2m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色粗砂混じり土。**出土遺物**は古代の土師器・須恵器、近世以降陶器片が少量出土。いずれも細片で図示出来ない。

SD26

SD21の西側で検出した小溝。東側をSX27に切られる。確認規模は確認長3m、幅0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色土で鈍い黄色砂ブロック混入。SD19と同方向であり、区画溝の一部か。

出土遺物は中世以降の土器片が1点出土したが、細片で図示出来ず、時期も不明。

② 井戸状遺構 (SE)

SE05

調査区南側で検出した直径1.5~1.6mを測る平面円形の井戸。褐色土で埋め立てられていたが1.7m程掘り下げた黄白色粗砂(酸化鉄分混じり)面で、不整円形の径0.5×0.6mの井筒を検出した。井筒の内容は安全対策から未掘であり不明。遺構検出ではSD09、SX03を切っている。近世後期以降の遺物を含むが、土管なども含み近代まで継続時期は下るか。

出土遺物(図9、写真8) 近世後期以降の陶器磁器、瓦、七輪、鉄釘、石炭殻、土管片などが出土。**40・41**は染付磁器。**40**は1/3片で、口径10.2cm、器高5.9cmを測る。外面裂文、内面圓線を呉須で描く。呉須の発色はやや暗い青色。白色の素地に青みを帯びた透明釉がかかるが、疊付は露胎で若干の重ね焼きの痕跡が残る。**41**は皿。器高2.2cm、器高4.5cmを測る。見込みに海浜風景を呉須で描く。呉須はやや暗めに発色する。全面に釉が厚くかかるが疊付は露胎。**40・41**いずれも19世紀中頃の肥前磁器。**42**は陶器鉢か皿1/3片。復元口径11.8cm、器高5.9cmを測る。灰オリーブ釉がかかるが、見込みは蛇の目状に釉剥ぎし、その部分を赤褐色に塗る。疊付は露胎であるが所々釉がかかり、重ね焼きの痕跡が残る。

③ その他の遺構（SX）

不明遺構・攪乱土坑などを合わせて報告する。大半が近世以降、近代にかけてのもの。

SX01出土遺物（図9） M1は銅錢。僅かに残る文字から寛永通宝であろう。直径2.4cmを測る。

SX03

調査区南側のSD11・09の上面で確認した近世以降近代にかけての廃棄遺構。埋土は黒灰色土で灰や炭、焼土などが混じり、上面に以前の建物基礎と思われる栗石などが多くあった。

出土遺物（図10~12、写真8） 中世～近世・近代の陶磁器、土器、挽き臼などが出土している。量としては多い。主なものを報告するが、必ずしも遺構の時期を示すものではない。

43～59は染付磁器。43～45は碗。43は広東碗底部。底径6.2cmを測る。見込みに文様が描き、目痕が4カ所ある。豊付は露胎で砂粒付着。18世紀末～19世紀初の肥前磁器。44は底部片で、底径4.4cmを測る。外面に網目？、内面に茄子？を呉須で描く。19世紀中頃の肥前磁器。45は筒形碗1/2片。口径14.2cm、器高6.6cmを測る。体部外面花唐草を呉須で描く。全面に青みがかった透明釉が厚めにかかるが、底部近くは部分的に釉がかからない。豊付は露胎で、その内面縁には砂が付着する。18世紀後半の肥前磁器。46～53は皿。46は1/2片で、口径10.0cm、器高2.35cmを測る。底部は蛇の目凹型高台で、内面見込みに花卉を描く。呉須の発色は良く、釉は厚めにかかる。高台内は無釉。19世紀の肥前磁器。47・48は見込みに五花弁の印花をもつもの。47は1/2片で、復元口径13.7cm、器高3.5cmを測る。体部内面に型紙刷りによる捩り文様を帶状に巡らす。呉須は濃い青色に発色し、光沢を持つ透明釉がやや厚めにかかる。豊付きは釉を搔き取り露胎。48は1/3片で、復元口径13.0cm、器高3.9cmを測る。外面は唐草、内面は草花を呉須で描く。呉須の発色はくすんだややぼける青色。高台内には宝？を描く。豊付は露胎。49は1/2片で、口径13.3cm、器高3.7cmを測る。体部外面唐草、内面には蓮を描くが、汚れがあり一部明瞭でない。呉須による文様は濃淡がある。47～49は18世紀代の肥前磁器。

50・51は口縁が外折して開く口縁が輪花状の皿。いずれも底部は蛇の目凹型高台である。50は口径14.4～14.6cm、器高4.55cmを測る。内面には蝶と草花を呉須で描く。呉須は淡青色に発色する。高台豊付きから蛇の目部は露胎で、重ね焼きの痕跡が残る。51は1/2片で、復元口径14.8cm、器高3.8cmを測る。内面見込みに草花を呉須で描き、呉須の発色は良く、濃青色を呈す。見込みは蛇の目状に釉を搔き取り、重ね焼きの痕跡が残る。52は1/3片で、復元口径20.3cm、器高3.0cmを測る。外面唐草、内面見込みは型紙刷りと濃み技法を併用して輪状に文様を描く。全面に施釉されるが、高台豊付は釉を搔き取り磨る。19世紀中頃の肥前磁器。53は型打の手塙皿。鮑形の形態で、最大径9.2cm、器高1.6cmを測る。外面松葉、内面貝と水（海）草を呉須で描く。他に同形のものが3点ある。54・55は蓋付鉢。54の蓋は1/2片で、口径11.6cmを測る。天井部には細長い板状の粘土を貼付けた紐が付く。口縁部内面にはかえりが付く。55の鉢は口径11.2cm、器高6.7cmを測る。54・55とも外面に牡丹を型紙刷り一部用いて描く。呉須の発色は良い。56は八棱の角鉢1/3片で、型打成形。復元口径13.3cm、器高5.95cmを測る。外面宝か花卉、内面蔓草か花卉を呉須で描く。19世紀前半の肥前磁器。57は口縁が輪花を呈す鉢1/3片。復元口径16.8cm、器高7.4cmを測る。型紙刷りで雲文様を描く。上掛けした釉は乳白色でやや厚め。明治以降のものか。58は蓋1/3片で、復元口径10.4cm、器高3.2cmを測る。外面、岩や樹木を呉須で描く。19世紀中頃の肥前磁器。59は蕎麦猪口底部片。蛇の目凹型高台で、底径6.3cmを測る。見込みに圓線と昆虫文を描く。青味がかった透明釉がかかる。高台部は蛇の目状に釉を搔き取るが、重ね焼き痕跡が残る。見込みには砂粒が付着する。60は白磁の德利で、破片から復元。口径3.2cmを測る。外面から頸部内面にかけて僅かに緑がかった乳白色釉がかかる。胴部内面はロクロ水引き痕が残る。肥前磁器の19世紀代のもの。61～69は陶器。61～64は碗。61は体部が丸味を持つ小碗。復

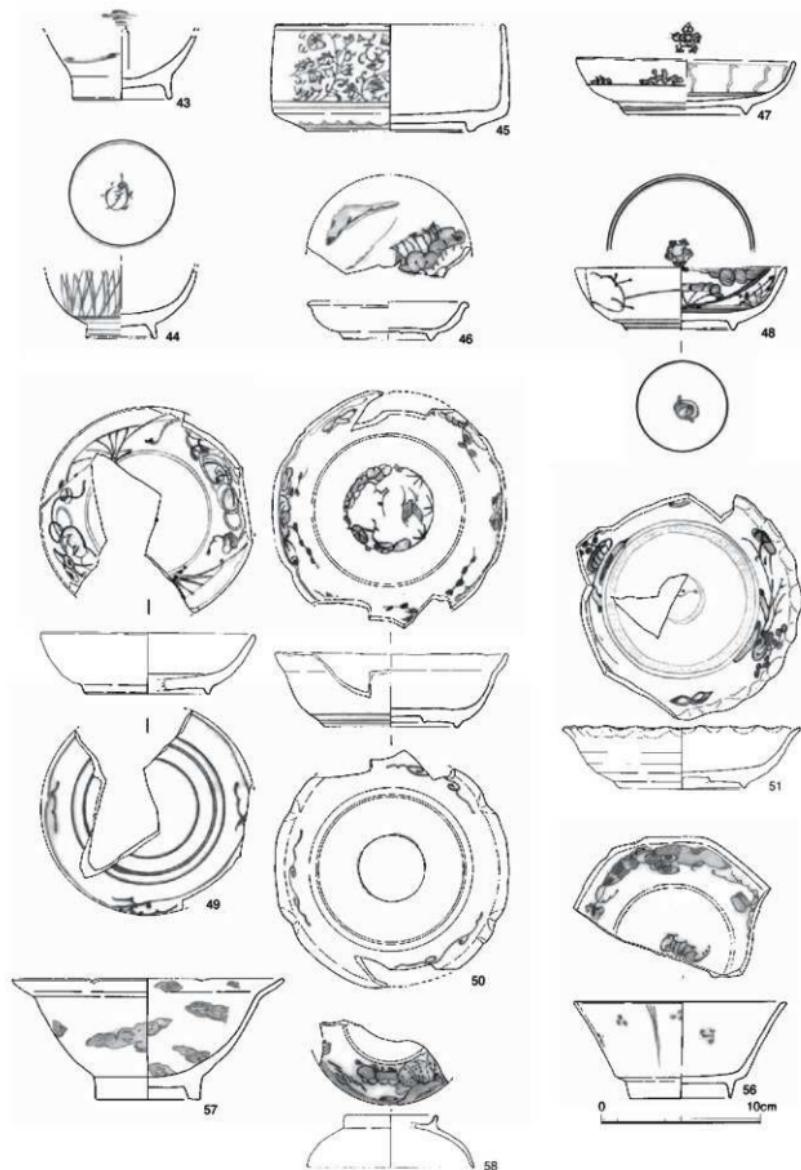


図10 SX03出土遺物① (1/3)

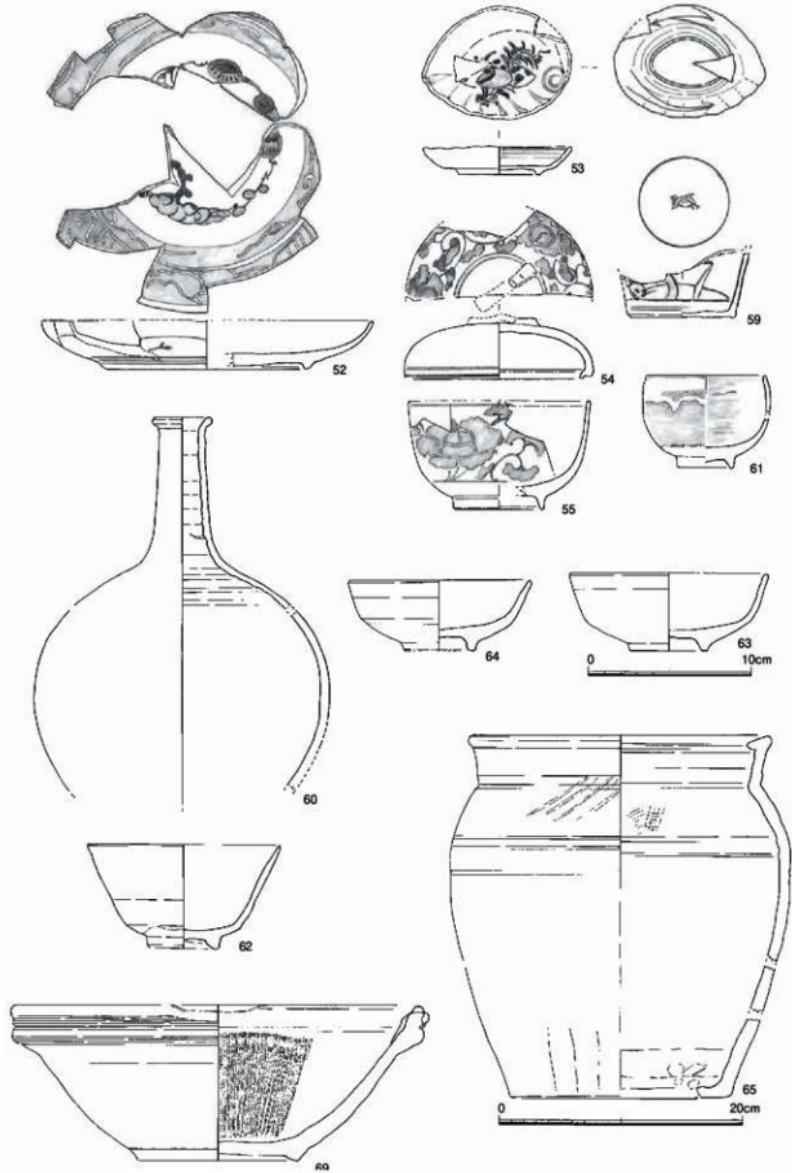


図11 SX03出土遺物② (1/3・1/4)

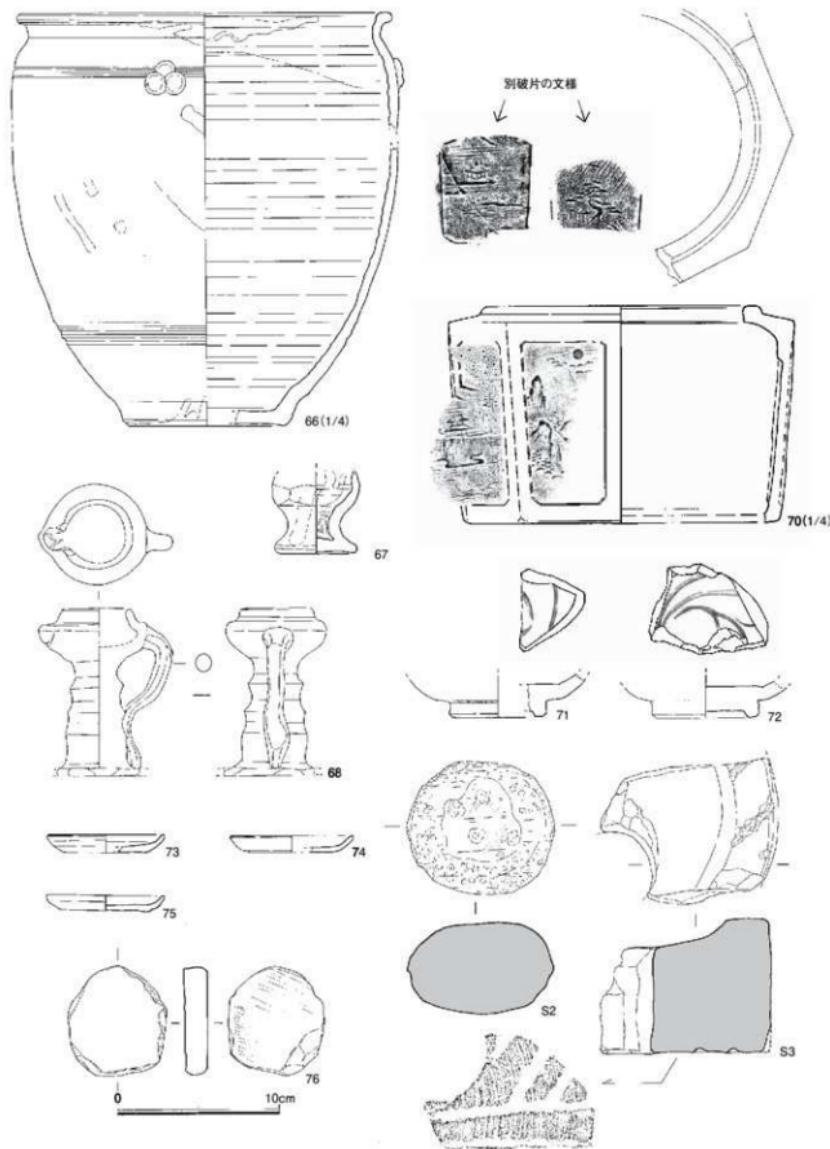


図12 SX03出土遺物③ (1/3・1/4)

元口径7.4cm、器高5.7cmを測る。体部内外面暗褐色釉をかけ、外面は更に鈍い黄褐色の長石釉をかける。高台部は露胎。**62**は1/3片で、復元口径12.0cm、器高6.4cmを測る。体部内外面暗灰黄色の釉がかかるが、高台部は兜状にケズリ出し露胎。高台部にはススが付着し、見込みには少量砂粒が付着する。17世紀前半～中頃の肥前陶器。**63**は1/2片で、復元口径12.2cm、器高4.8cmを測る。内外面明光沢のある透明な黄褐色釉がかかる、表面には水裂が入る。見込みは蛇の目状に釉剥ぎし、疊付は露胎。**64**は口径11.0cm、器高4.4cmを測る。明黄褐色の素地に鈍い黄橙色の釉がかかるが、見込みと疊付は露胎。**63・64**は18世紀の肥前陶器。

65・66は壺。**65**は破片から図上復元。復元

口径24.8cm、推定高29.8cmを測る。胴部上半に3条の凹線が巡る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面上半に斜めの並行タタキ痕が残り、内面には當て具痕が残る。胴部中央から下胴部はヨコナデとナデで、底部はナデで内面に指挿え、工具痕が残る。内外面に黒褐色釉がかかる。底部縁は釉が剥げる。18世紀～19世紀の肥前陶器。**66**は3破片から図上復元。復元口径30cmを測る。外面肩部と下胴部に2条と3条の沈線が巡り、肩部には三ツ星状に粘土を貼付ける。胴部外側から口縁部内面には黒褐色の釉上に薙灰釉をかける。内面は褐色釉を薄くかける。底部は無釉で、明赤褐色を呈す。**67**は小型の花入。底径4.8cmを測る。手捏で内面シボリ痕が残る。外面淡黃色釉上に黄味がかった灰オリーブ釉(長石釉)を二度掛けする。内面は釉が垂れるが露胎。底部も露胎で回転糸切り。**66・67**は19世紀の高取焼。**68**は灯火具。口径4.3cm、器高10.3cmを測る。底部縁辺は欠損する。黒褐色の鉄釉が厚めにかかるが、底部は回転糸切りで露胎。九州産で19世紀前半のもの。**69**は擂鉢。破片から図上復元。復元口径33.6cm、器高12.8cmを測る。素地が赤褐色を呈す焼き締め陶器で、部分的に鉄漿をかける。内面には6本単位の掘り目があり、部分的に粗いハケ目がある。**70**は土師質の平面八角形の火鉢。破片から復元。復元口径20cm、器高17.8cmを測る。表面はミガキに近いナデで平滑に仕上げるが、各側面には型打で文様を付ける。内面は使用により黒化し、部分的に表面が剥げる。外面は橙色を呈し、胎土は精良、金雲母片を含む。**71・72**は中国産の竜泉窯系青磁碗。いずれも底部片。**71**は1/6片で復元底径6.0cmを測る。見込みにヘラの片彫りの文様がある。灰オリーブ釉がかかるが、高台部は露胎。高台部はケズリ出しで疊付は擦る。**72**は1/3片で、復元底径6.6cmを測る。見込みにヘラ片彫りによる花文を施す。灰オリーブ色釉が厚めにかかるが、高台部は一部に釉がかかる以外露胎。高台はケズリ出す。**73～75**は土師器小皿。いずれも2/3片・1/4片・1/2片で、復元口径は**73・75**は7.2cm、**74**は7.6cm、器高は**73**は1.1cm、**74**は1.0cm、**75**は1.05cmを測る。調整は体部回転ヨコナデ、外底部は回転糸切り。**74**は部分的に黒斑がある。色調は**73・74**は鈍い黄橙色、**75**は鈍い橙色を呈し、胎土は精良で、**74・75**は金雲母を多く含む。**76**は土器底部転用の瓦玉。大きさは6.0×6.7cm、厚さ1.4cmを測る。側面は打欠き、上面は摩滅、下面はハケ目。色調は黒色を呈し、胎土は精良。**S2**は円形の叩石又は磨石。大きさは8.2×9.0cm、厚さ5.6cmを測る。全体に風化・摩滅が著しいが、上下面是擦り面で、側

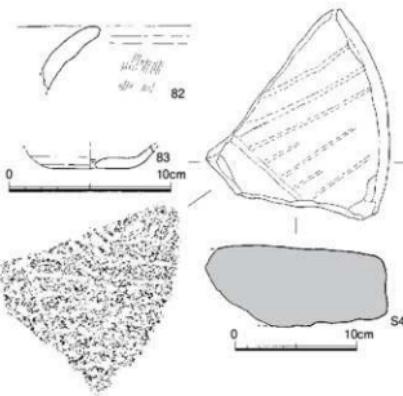


図13 ピット出土遺物 (1/3・1/4)

面敲打痕が残る。色調は灰色を呈し、石材は堆積岩系か。**S3**挽き臼の上臼1/6片。大きさは14.5×12.1cm、厚さ11.1cmを測る。摺り面はノミなどの工具によるケズリ後、蟻による太い条溝を掘る。条溝の間隔は粗い。面は使用により摩滅する。また焼かれ、ススが付着する。色調は明緑灰色で、石材は凝灰岩か。

SX20出土遺物（図9）**77**は染付磁器皿底部小片。復元高台径7.0cmを測る。見込みに呉須により帶状文様が施される。豊付は露胎。形態から18世紀初め頃の肥前磁器か。

SX24出土遺物（図9）**78**は土師器の挽底部1/5片。僅かに高台が付く。器表は摩滅し、調整は不明。色調は灰白色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。

SX28出土遺物（図9、写真8）**79・80**は土師器小皿。**79**は完形で口径7.8cm、器高1.3cm、**80**は復元口径7.9cm、器高1.6cmを測る。調整は**79**はヨコナデで、**80**は摩滅がひどく調整は不明。外底部はいずれも回転糸切り。色調は**79**は淡橙色、**80**は鈍い黄橙色を呈し、胎土はいずれも精良。

SX29出土遺物（図9）**81**は須恵器の壺か鉢の底部1/4片。復元底径8.8cmを測る。ロクロ成形で、調整は体部回転ヨコナデ、外底部は回転糸切り。色調は灰色、胎土は白色粒子を若干含む。

④ ピット出土遺物（図13、写真8）

82はSP09出土の土師器の甕口縁部細片。外折する口縁で、調整は外面タテハケ目後ヨコナデ、内面は摩滅し不明。色調は灰白色を呈し、胎土は1mm内砂粒多く混入。**83**はSP10出土の土師器の小皿1/3片。調整は摩滅がひどく不明。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は精良であるが、やや軟。**S4**はSP12出土の挽き臼の下臼片。全体に敲打調整で平面は平滑に仕上げる。摺り面は使用が激しく摺り目の条溝がかすかに残る程度に磨り減る。石材は灰色を呈す凝灰岩。

3. まとめ

大橋E遺跡では過去の調査で、繩文時代からの遺物が検出されているが、今回の調査では弥生時代前期末から中期初め頃の甕38が最も古い遺物である。遺構として古いものはSP08で、古墳時代後期頃の土師器を含む。ただ遺構としては大きく中世後期（戦国時代Ⅰ期）SD19・21と近世後期（18世紀末～19世紀前半Ⅱ期）SD06・09・11などの時期に分類出来る。Ⅰ期はSD19で出土遺物は中国産青磁など12～13世紀頃の遺物も含むが、土師質土器の鉢や湯釜の形態などから16世紀頃が主体と考える。SD19は直角に曲がる断面V字を呈す溝で、屋敷の区画溝である。同様の区画溝は第7次・9次調査でも検出されている。Ⅱ期も18世紀以降の遺物から近世後期の屋敷地の溝であると考える。

本調査区の小字名は矢台であり、地元の人の話や「南区ふるさと」という南区民俗文化財保存会が出した本では矢を射かける台があった所という。また図17は江戸時代、秋月郷士の大倉種周が文政年間頃に作成した古野城跡の絵図であるが、この絵図に矢台が描かれている。古野城は『筑前國統風土記』（拾遺にも古野城の記述あり）などによれば、的野主税入道了心というものが居た所という記述がある、この的野氏は黒田家臣團には認められるが、古くても16世紀頃迄と考える城の時期とは異なり、城主としては矛盾する。当地点から南に位置する春日市大字下白水の丘陵上に天浦城がある。天浦城は一岳城の端城で、佐賀県鳥栖市の勝尾城を本城とする筑紫氏の家臣鳴嶋慶が城主とある。筑紫氏は最盛期早良区の安樂平城まで勢力を広げていることから、古野城も筑紫氏の影響下の城と考えることも出来る。一般に中世山城は戦時に籠もる為の城であり、日常生活の場は籠の「里城」と呼ばれる館であることが多い。矢台地区は地籍図（図16）では一辺約100mの方形にまとまる範囲であり、形状からは館跡の可能性を示す。しかし筑前地方では館地名に矢台という地名はないが、矢台が矢を

射る台があった所という意味から考えて筆者としては館跡の存在を指摘したい。古野城や館跡の痕跡を確認するために三度ほど現地踏査を行なったが、市街化が著しく明確な痕跡は残っていなかった。ただ地籍図を見ると、矢台地区の北側小字境に沿って堀跡を伺わせるような細長い地割りがある。現地で現況を確認した所、三面側溝の水路が巡り、かつて堀があった可能性がある。大橋E遺跡内には

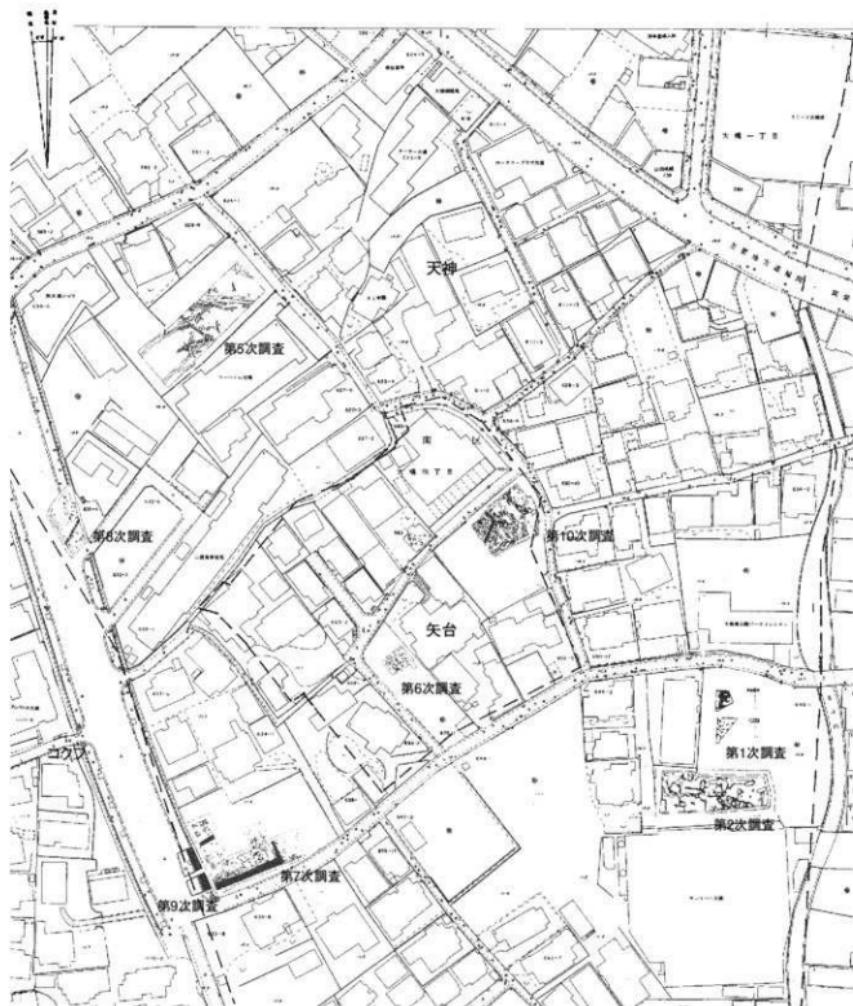


図14 大橋E遺跡調査区配置図 (1/1,500)

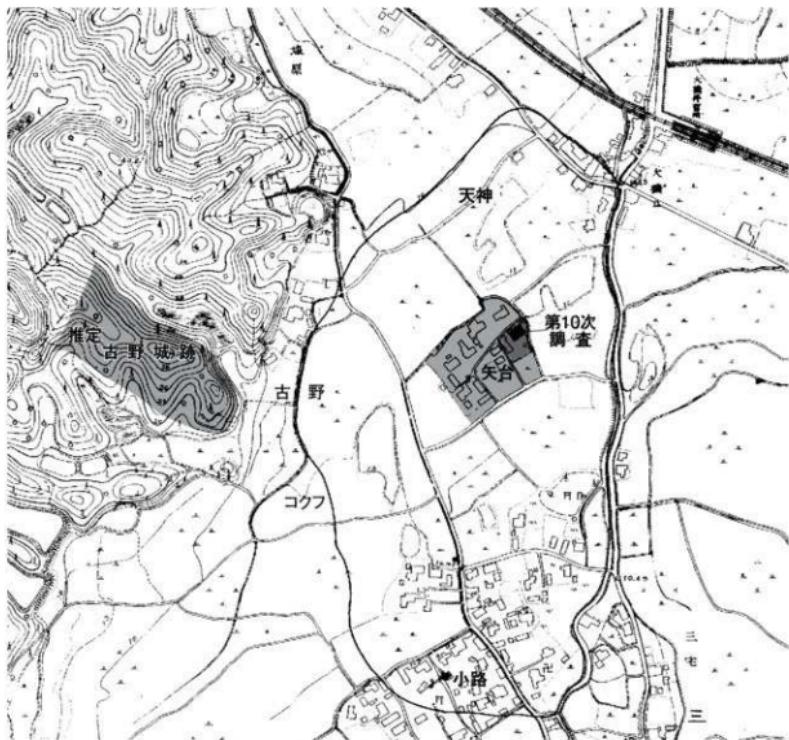


図15 大橋E遺跡周辺旧地形図 (1/5,000)

戦国時代の屋敷地が存在した可能性があり、今後の調査にもその可能性を考えて行なうことが望ましい。

古野城、矢台については九州大学大学院教授の服部英雄氏、佐賀大学名誉教授の日野尚志氏、福岡市博物館の鳥果京一氏ら各氏にご教示を受けました、記して感謝の意を表します。

参考文献

貝原益軒編 伊藤尾四郎校訂 増補『筑前國統風土記』2001年第四冊 文獻出版

『南区 ふるさと』1992 福岡市南区民俗文化財保存会

春日市史編さん委員会『春日市史 上巻』1995
春日市

『筑前秋月城跡－IV－』甘木市文化財調査報告 第17集 1984 甘木市教育委員会



図16 第10次調査区周辺地籍図 (1/2,500 昭和40年作成)

那珂郡三宅郷古野城ノ圖
大倉種周『古戦古城之図(2,4)』4冊51

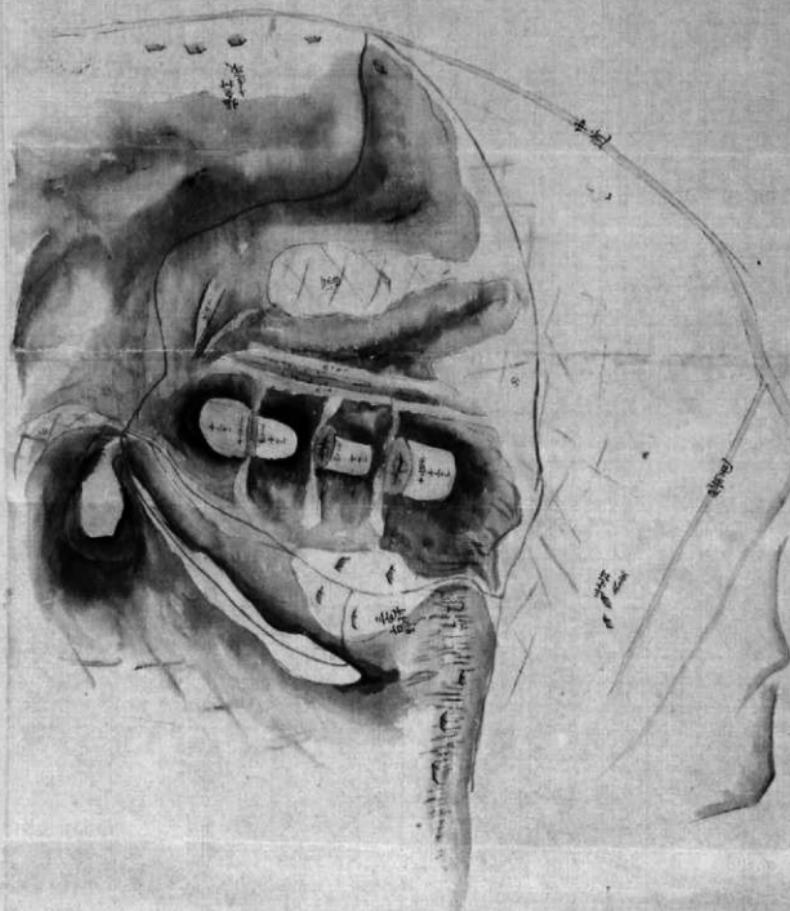


図17 那珂郡三宅郷古野城ノ圖（大倉種周『古戦古城之図(2,4)』4冊51 33.2cm×46.4cm）



写真1 大橋周辺航空写真（昭和23年撮影）



写真2 調査区全景（西から）



写真3 調査区東側Ⅰ区全景（北から）



写真4 調査区西側Ⅱ区全景（北から）

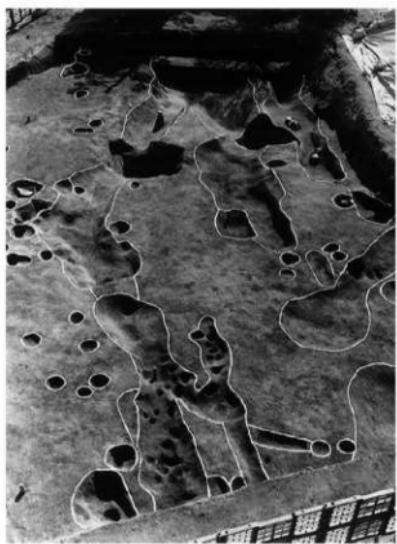


写真5 SD06・09・11（北から）



写真6 SD19・21（北から）



写真7 SD19北壁土層（南から）

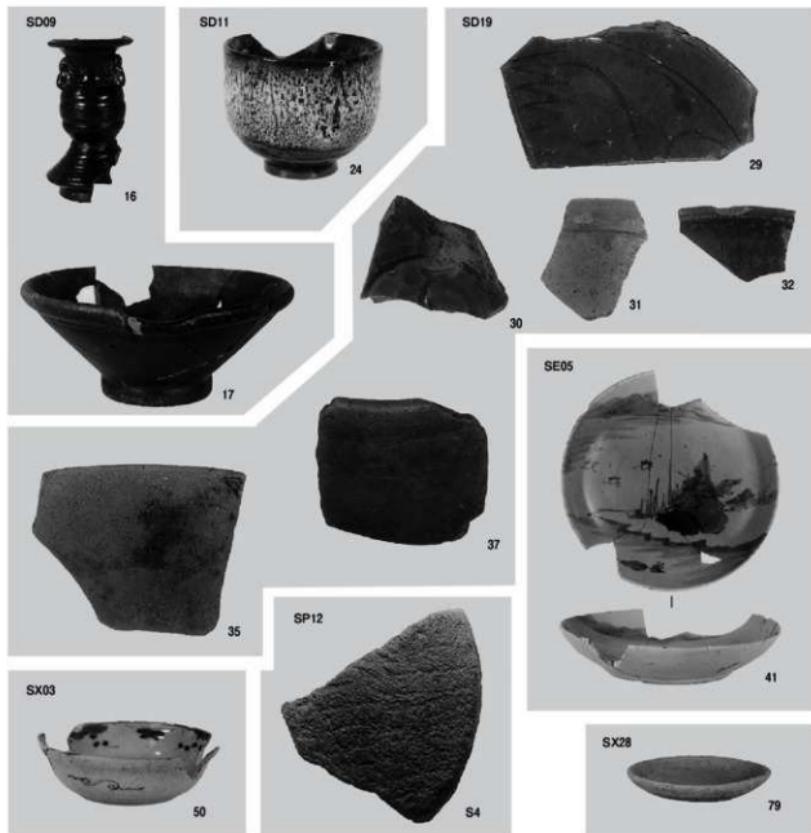


写真8 各遺構出土遺物（縮尺不統一）

II 横手遺跡群第1次調査

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成16（2004）年5月21日に地権者の徳永正信氏より、福岡市南区横手3丁目273番6における個人専用住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願（事前審査受付番号16-2-213）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は横手遺跡群の南端部に位置するため、埋蔵文化財課は試掘調査を行ない、埋蔵文化財を確認した。その結果予定建築物の基礎工事によって地下の遺構が破壊されることから、記録保存の調査が必要であるとして、国庫補助金を受けて、建物建設予定地部分を対象に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成16年6月18日から平成16年7月13日迄行なった。調査実施面積は申請面積259.94m²中の103m²である。また報告書作成作業は平成19年度に実施した。

調査にあたっては、地権者及び工事関係の方々に協力を受けた。記して感謝の意を表します。

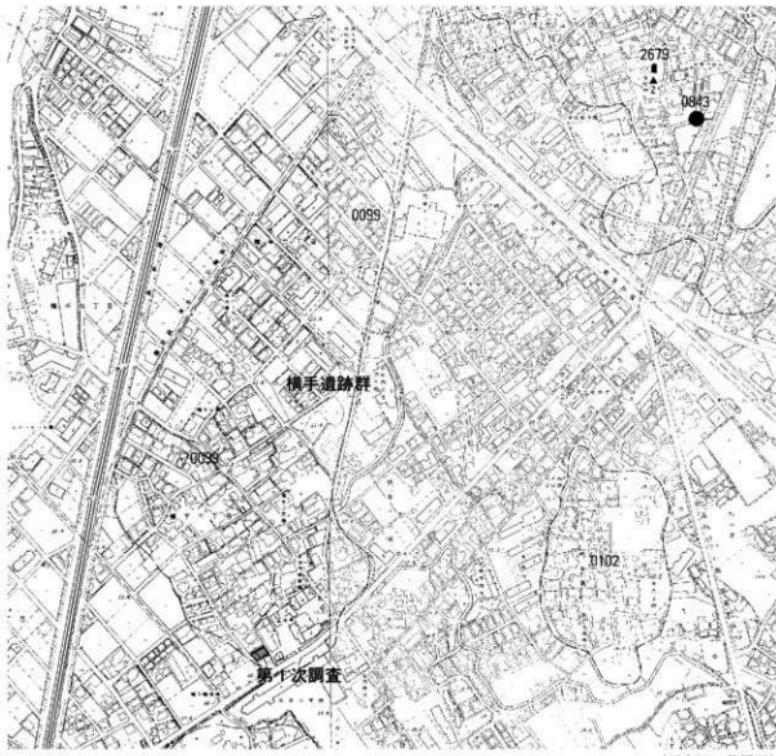


図18 横手遺跡群調査区位置図 (1/6,000)

(三宅39 井尻25)

2. 調査の組織

平成16年度調査・19年度整理の関係者は以下のとおりである。

【平成16年度】

調査委託者	徳永正信	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財課長	山口譲治
事務担当	埋蔵文化財課調査第2係長	池崎謙二
	文化財整備課管理係	御手洗 清
事前審査担当	埋蔵文化財課事前審査係	久住猛雄
調査担当	同 課調査第2係主任文化財主事	山崎龍雄
調査作業	井上一雄、井上利弘、井上英子、大橋由美子、岡部安正、北原由紀子、佐藤アイ子、堤 正子、別府俊美	

【平成19年度】

整理総括	文化財部埋蔵文化財第2課長	力武卓治
庶務担当	埋蔵文化財第2課調査第1係長	杉山富雄
	文化財管理課管理係	鈴木由喜
整理担当	埋蔵文化財第2課調査第1係主任文化財主事	山崎龍雄
整理作業	木藤直子	

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境（図1・18）

横手遺跡群は福岡平野の南側に位置し、平野中央部を南北に貫流する那珂川中流域東側の沖積微高地上に立地する。横手遺跡群では、今回初めての調査であったが、周辺には日佐遺跡群や、井尻B遺跡群、五十川遺跡、寺島遺跡などの遺跡が存在し、たびたび開発に伴い調査されている。それらの各遺跡での調査成果から、最も古い時期では井尻B遺跡群で旧石器時代遺物が出土している。日佐遺跡群では縄文時代後期から中世にかけての遺構・遺物を検出した。また井尻B遺跡群や五十川遺跡では弥生時代から古代にかけての大規模な集落を確認し、井尻B遺跡群では古代寺院跡の存在も確認している。古墳としては井尻B遺跡で前方後円墳の井尻B1号古墳が存在していた。

調査地の南側、日佐の地名の由来は古代の通訳の名称から来ており、歴史的にも由緒ある地名である。調査地は、福岡市合併前は筑紫郡日佐村、江戸時代は御笠郡横手村である。調査地の東側にある正法寺は江戸時代から記録が残る、浄土宗の寺院である。

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要 (図18、写真9・20)

本調査区は横手遺跡群の南側に位置し、標高は約13mを測る。調査区一帯は西鉄大牟田線・JR鹿児島本線、国道31号線からややはざれた地域であるため、開発が井尻地区に比べそれ程進んでおらず、住宅地・農地が混在する地域である。調査は排土の場内処理の関係から二分割して調査を行なった。重機で表土を30cm前後掘り下げた面（黄褐色シルト質細砂からオリーブ褐色粘質シルト）で遺構を確認した。この遺構面には土器などが含まれていたため、その下に遺構の存在を考え、更に30cmほど掘り下げた明黄褐色砂質土または純い黄褐色細砂面で再度遺構確認を行ない、遺構を確認したので、調査を行なった。その結果、上下2面の調査となつた。この面の遺構面は無遺物で、出土遺物の中にもそれ以前の時期の遺物は出土していないので、調査はこの面で終了した。

2. 第1面の調査 (図21、写真10・13)

上面で、検出遺構は溝状遺構7条、土坑2基、焼土坑1基、ピットなどである。古墳時代後期から中世前期頃の遺構・遺物を検出した。

① 溝状遺構 (SD)

SD01 (図22、写真11)

調査区東側で検出した南北溝。主軸は磁北からやや西に振れる。確認規模は溝幅1.2~1.8m、深さは北壁で最大深さ0.5mを測る。埋土は暗褐色土や純い黄褐色砂質土で、埋土中には粗砂を含む。土層では表土下から切り込んでおり、遺物は古いものを持たないが、時期的には新しい。

出土遺物は弥生土器と細片5片と黒曜石剣片が3片出土しているが、図示出来るものはない。

SD02 (写真11)

SD01に切られる溝である。確認長4.2m、幅0.6m、深さは浅く0.05~0.1m程度である。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物 (図24) 古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器、須恵器片が少量出土している。**1**は土師器の把手。把手の先端は欠ける。表面は摩滅がひどいが指押え仕上げか。色調は橙色を呈し、胎土は粗砂粒が多く含む。**2**は須恵器の蓋1/7片。復元径13.1cmを測る。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は精良。8世紀前半の奈良時代のものか。

SD06 (写真12)

中央部をSD01とほぼ並行して南北に延びる溝。SD06、SK04・SK05に切られ、両土坑下にはこの溝下部が残っていた。溝幅は0.6~1.14m、深さは0.3m前後を測る。埋土は褐色土で僅かに粗砂を交える。

出土遺物 (図24) 弥生土器から古墳時代土師器、須恵器の細片を少量含む。中世以降の白磁細片を1点含むが混入か。**3**は須恵器壺頭部1/4片。復元頭部径13.2cmを測る。外面木目直交の並行タタキ後回転ヨコナデ、肩部はカキ目。内面は回転ヨコナデと同心円状當て具痕が残る。色調は褐灰色を呈す。

SD09 (写真13)

中央部で検出した東西方向の溝。東側でSD06を切る。確認規模は最大長5.26m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰黄色土で、純い黄色粘質シルトブロック混入する。底面には酸化鉄分が沈着していた。

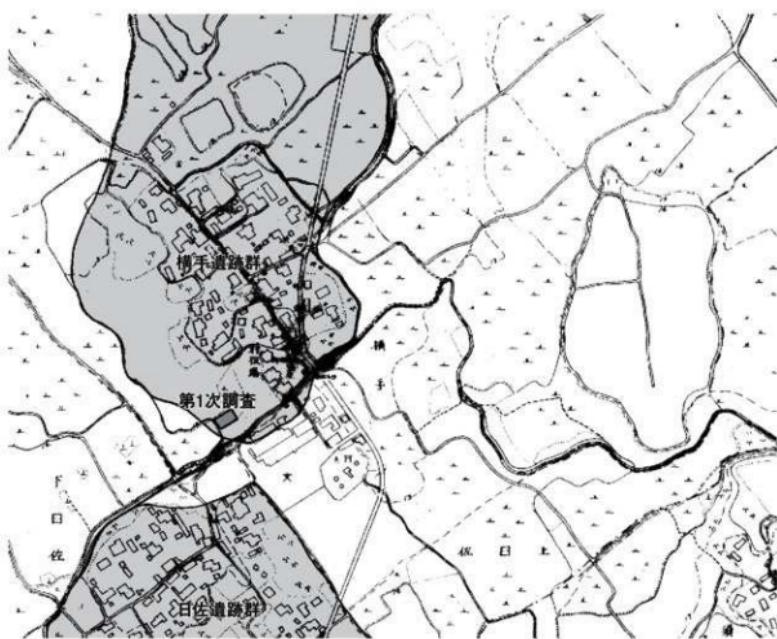


図19 横手遺跡群旧地形図 (1/5,000)

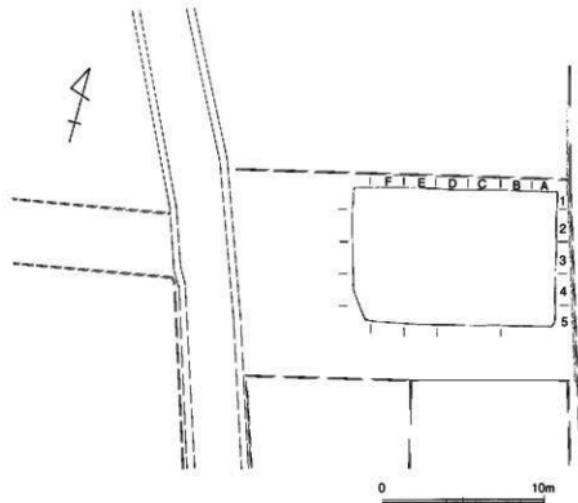
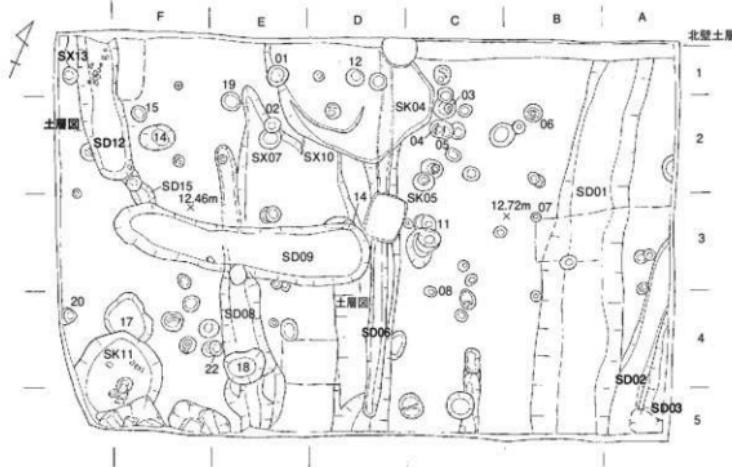


図20 第1次地点調査区 (1/300)

第1面



第2面

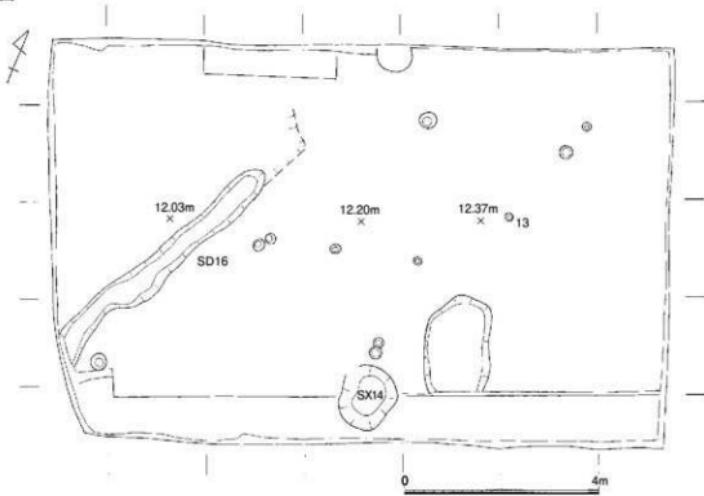


図21 第1・2面造構配置図(1/100)

(※数字はビット番号)

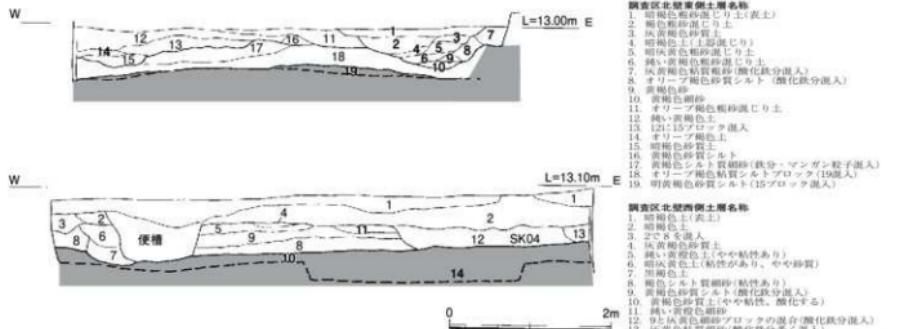


図22 調査区北壁土層図 (1/60)

出土遺物 (図24・29、写真21) 古墳時代～中世前半の土師器・須恵器、中世のうち黒土器（黒色土器A類）、滑石製品などが少量出土している。4・5は土師器。4は丸底の壺口縁部1/4片。復元口径16.9cmを測る。調整は摩滅が進むがヨコナデか。5は小皿口縁部1/10片。復元口径8.6cm、器高1.1cmを測る。4・5とも器表の摩滅は著しいがヨコナデか。色調はいずれも純い黄橙色を呈し、胎土は、4・5とも1mm内外砂粒を多く含む。6は黒色土器A類椀口縁部1/7片。復元口径16.7cm、残存器高4.3cmを測る。器表の摩滅は著しいがナデか。色調は内面オリーブ黒色、外面は純い黄橙色を呈す。胎土は精良、焼成は良好。7は奈良時代の須恵器高台壺底部1/2片。復元底径は8.8cmを測る。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色で胎土は精良。S1は滑石製石鍋片の転用であるが、用途は不明。最大横長17.0cm、縦長15.5cm、最大厚2cmを測る。割口面にはノミなどの工具痕が残る。

SD12 (図23、写真13・16)

調査区北西隅で検出した南北溝。確認規模は長さ3m、幅0.8m、深さは0.4m前後を測る。溝埋土は上下二層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は暗オリーブ褐色土である。この溝南端から0.6m隔てて東西溝のSD09があり、間には両溝を繋ぐ幅0.4m、深さ0.07m程の浅い溝がある。遺物の時期は若干異なるものの、関連があるのかも知れない。

出土遺物 (図24・29、写真21) 中世前期の土師器など遺物が出土している。8～12は土師器。8は丸底の壺1/6片。復元口径は14.6cmを測る。調整はやや摩滅するが、外面ヨコナデで、内面は丁寧なナデ仕上げ。9～11は小皿。9は完形で、10・11は1/6片・1/3片。口径は9がやや歪み、9.2～9.7cm、10・11は復元で9.3cm・9.8cm、器高1.5cm・1.0cmを測る。調整は外底が回転ケズリ、体部は回転ナデ。9の外底には板目が残る。8～11の胎土は10が1mm内外砂粒を多く混入以外精良。色調は純い黄色、浅黄橙色、暗灰黄色、灰黄色を呈す。12～14は黒色土器A類の椀。12は口縁部片と底部片から復元した。復元口径は14.1cm、器高5.4cmを測る。調整は外面ナデ、内面は丁寧なナデ。13・14は底部片。復元底径は7.0cm・6.0cmを測る。色調は、いずれも内面はオリーブ黒色、外面浅黄色を呈す。調整は、13は外側ヨコナデ、内面丁寧なナデ、ミガキ。14は外底ヘラケズリ、体部ナデ、内面は摩滅する。胎土は12が1mm内外砂粒多く混入し、他は精良。15～18は黒色土器B類椀。15・16は口縁部片1/8・1/6片で、復元口径14.0cm・16.2cmを測る。調整は体部内外面がヘラミガキ。色調は内外面15がオリーブ黒色、16は緑黒色を呈す。いずれも胎土は精良。17・18は底部片。それぞれ復元底径6.6cm・6.6cmを測る。調整はやや摩滅するが底部内面はヘラミガキ、外面はナデ。色調は暗緑色、オリーブ黒色を

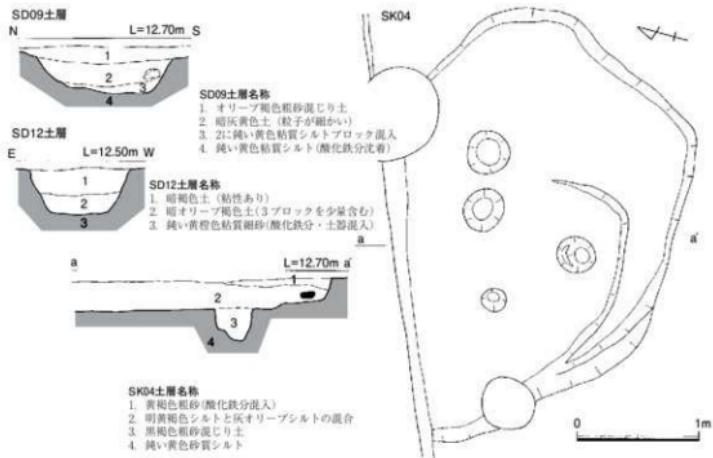


図23 SD09・12土層図・SK04 (1/40)

呈し、胎土はいずれも1mm内外砂粒を含む。**19**は土師質土器の捏ね鉢1/5片。復元口径23.8cm、器高7.0cmを測る。調整は体部外面板ナデで粘土帶と指押えの痕跡が残る。内面は細かいハケ目か丁寧なナデ。内面から口縁部にはススが付着する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は1mm砂粒。金雲母を少量含む。**S2**は扁平な楕円形を呈す磨石の1/2片。最大残存長11.1cm、幅7.7cm、厚さ6.4cmを測る。表面丁寧な擦りで擦痕が残る。上面は僅かに窪む。色調は所々ススが付着するが灰色を呈し、石材は安山岩である。

② 土坑状遺構 (SK)

SK04 (図23、写真15)

調査区北壁沿いで検出した平面不定形の土坑。北壁に掛り全体規模は不明。確認規模は東西長3.6m、南北2.4m、深さ0.3mを測る。埋土は明黄褐色シルトと灰オリーブシルトの混合で、酸化鉄分を多く混入する。この遺構埋土上面でピット、底面でピットとSD06の続きを確認した。重複関係からSD06より新しい。

出土遺物 (図26) 弥生土器が大半であるが、古墳時代～中世の土師器、黒曜石片などが少量出土。図示する遺物が時期を示すものではないが、調査区の上限の時期を示す参考として図示する。

20～24は弥生時代前期末～中期初頭のもの。**20**は金海式壺棺の口縁部小片。口縁内面に段を持ち、口唇部には刻目が付く。器表は摩滅するが、外面ハケ目が残る。**21**は壺で口唇部に刻目が付く。調整は摩滅がひどく調整不明。色調は浅黄橙色、純い黄橙色を呈し、胎土にはいずれも1～3mm程の砂粒を多く含む。**22～24**は壺の底部。**22**は上げ底で、底径7.2cmを測る。調整は胴外ハケ目で、その他はナデ。**23・24**は平底で、1/3片・1/2弱片。復元底径8.0cm・7.7cmを測る。調整は、**23**はやや摩滅するがナデ。**24**の胴外側はハケ目。色調はいずれも橙色を呈し、胎土は1～2mm砂粒を多く混入。

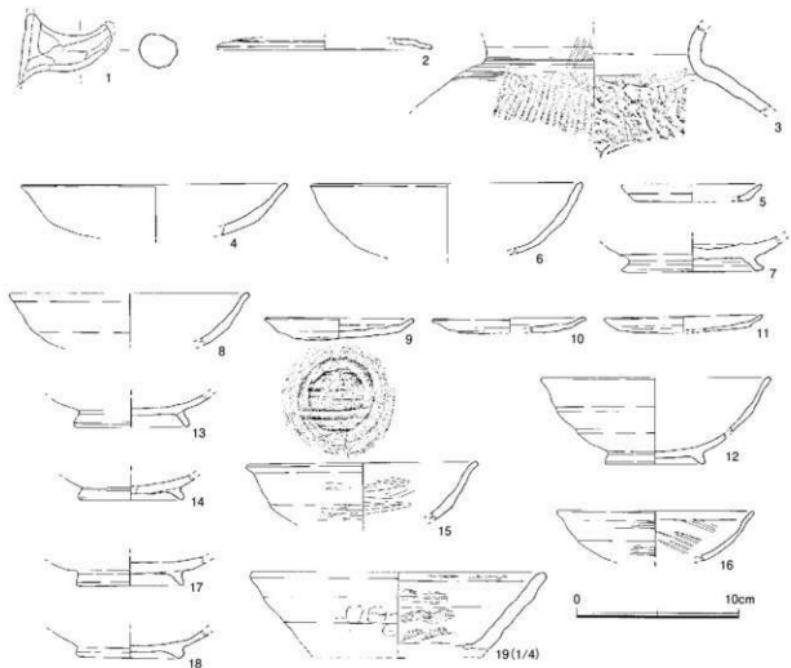


図24 第1面各溝出土遺物 (1/3・1/4)

SK05 (図25、写真14)

調査区中央部で検出した平面隅丸長方形状を呈す壁が焼けた土坑。規模は長軸長0.95m、短軸幅0.76m、深さ0.32mを測る。断面は逆台形を呈す。壁は固く焼けていたが、底面は焼けていない。また壁には粘土が貼付けてられていたのか、底に近い部分は壁が崩落している。粘土幅は1cm余りである。埋土は上層が黒褐色土で焼土、炭化物混じり、下層は暗褐色土で炭化物混じり、いずれも粘性が強い。**出土遺物**は古墳時代土師器、須恵器の細片などが少量出土しているが、図示出来るものはない。

SK11 (図25、写真17)

調査区南西隅で検出した不整円形を呈す土坑。一部は調査区外で擾乱を受ける。確認規模は土層図部分で1.6m、深さ0.13mを測る。後世の擾乱を受けたようで残りは悪い。埋土は暗灰黄色粗砂混り土で酸化鉄分が底面に沈着する。

出土遺物 (図26、写真21) 古墳時代後期末の土師器、須恵器が出土した。**25～27**は土師器。**25**は甕の口縁部1/5片。復元口径15.8cmを測る。口唇部直下に沈線状の段が付く。器壁は厚めである。調整はナデで、口縁部外面黒斑がある。**26**は甕の把手部。調整は、外面はナデ、内面はケズリ。**27**は丸底の鉢1/2片弱。復元口径11.2cm、器高はやや傾くが最高で3.8cmを測る。調整は内外面ナデで、外面部分的にケズリを加える。色調は**25・26**は橙色、**27**は赤から鈍い橙色を呈し、胎土は、**25・26**は2mmほ

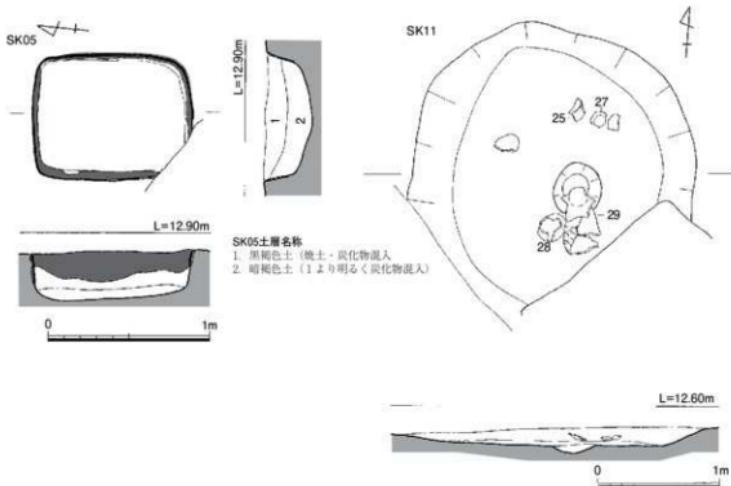


図25 SK05・11 (1/30・1/40)

どの砂粒を多く含み、27は1mm程砂粒を含む。28・29は須恵器。28は平瓶で口縁部を欠く。最大胴径17.0cm、残存高9.8cmを測る。調整は胴部外面上半から内面は回転ナデ、外面下半は回転ケズリ、外底部はナデ。指押えである。外面所々自然釉がかかる。29は大甕の胴部片。破片で歪んでいるので全容は不明。外面木目直交の並行タタキ、内面は同心円状の當て具痕が残る。外面自然釉が厚くかかり、焼成時に付着したと思われる坏蓋片が2個体分付着している。焼成時についたものである。色調は、28は明青灰色、29は黄色を呈す。須恵器は小田富士雄編年のV期のものであろう。

③ ピット・その他の遺構出土遺物

ピット出土遺物 (図27、写真21) ピットは60基余り検出した。その内、遺物が出土したものは22基ある。埋土は大きく淡褐色土、褐色土、暗褐色土の3種類に分類出来た。弥生土器～中世にかけての遺物が細片で少量出土した。30はSP10出土。土師器の小皿1/5片で、復元口径9.7cm、器高0.7cmを測る。調整は摩滅がひどく不明。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は精良。

その他の遺構出土遺物 (図27) 31～33はSX07出土遺物。SX07はSX04南側の浅い落込み。31は中国産白磁碗口縁部細片。口縁部は端反で、厚目の乳白色の釉がかかる。32は青磁碗底部1/8片。復元底径6.0cmを測る。外底高台内には砂粒が付着する。表面にはオリーブ灰色釉がかかる。33は土師器小皿1/6片。復元口径9.2cm、器高1.0cmを測る。器表面は摩滅が進むが、底部は回転糸切り、体部はナデか。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は精良。34はSX10出土。SX10はSX07の北側の浅い落込み。土師器小皿底部1/2片。復元底径5.2cmを測る。調整は体部から内面は回転ナデ、外底部は回転糸切り。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は精良。形態的に中世後期以降のものか。35～40はSX13出土。SX13はSD12の西側の浅い落込みで、SD12の一部の可能性がある。35～37は土師器の坏。いずれも丸底のものである。35は1/7片、36は1/8片。35は復元口径12.8cm、復元器高3.5cmを測る。いずれも器表は摩

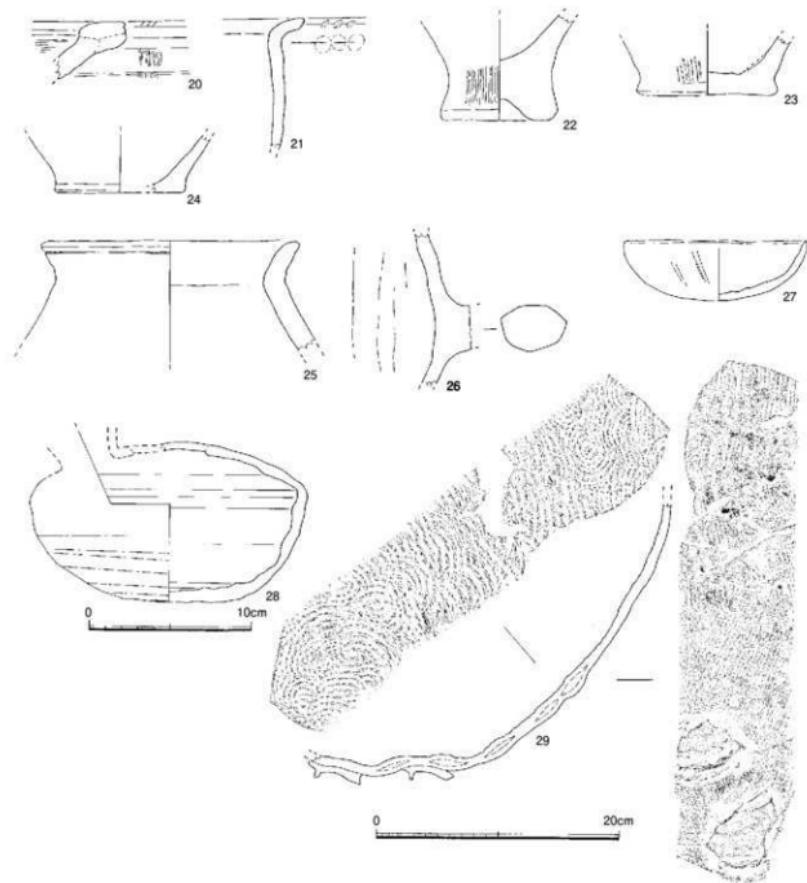


図26 第1面各土坑出土遺物（1/3・1/4）

減が進み、調整は不明であるが、35は回転ヨコナデ。色調は灰色～浅黄橙色で、37の内面は黒く、黒色土器A類楕の可能性がある。38は黒色土器A類の楕口縁部1/6片。復元口径14.8cmを測る。調整は外面やや摩滅するがナデ、内面はヘラミガキかナデで平滑に仕上げる。直接接合はしないが同一個体と思われる底部片も図示しておく。底部の調整は外表面ナデ。色調は内面オリーブ黒色、外面は浅黄色を呈す。胎土は精良。39は白磁の小杯。近世と思われる。残存器高は2.5cm以上。薄い乳白色の釉がかかるが、高台内は露胎。40は須恵器の小壺胴部1/5片。調整は、底部はヘラケズリ、外表面は回転ヨコナデ。底部にはヘラ記号がある。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良。

遺構面出土遺物（図27・29、写真21）41・42は須恵器。41は壊底部1/6片。復元高台部径8.0cmを測

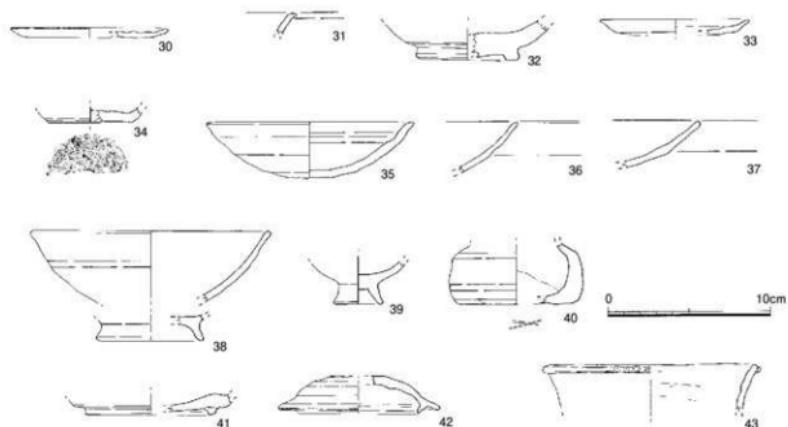


図27 第1面各遺構出土遺物（1/3）

る。調整は回転ヨコナデ。8世紀前半のもの。**42**は壊蓋1/4片。口縁はかえりを持つ。復元口径7.4cm、器高2.3cmを測る。調整は天井部回転ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。外面には自然釉がかかる。V期のもの。色調はいわゆる灰色。胎土は、**41**は精良、**42**は2mm程砂粒が多く含む。**43**は刻目直帶文土器の壺口縁部1/6片。口縁部に1条の突帯が貼付き、棒状工具による刻みを施す。調整は内外面ヨコ板ナデ。屈曲部に突帯を持つ器形であろう。色調は褐色を呈し、胎土は2mm程砂粒・金雲母を多く含む。**41**は遺構面。**42**は表採、**43**は北壁トレンチ出土。

S3は石包丁の破片。残存長7.1cm、残存幅4.8cm、最大厚さ0.65cmを測る。表面は部分的に剥落するが、研磨痕が残る。刃部は刃こぼれしている。色調は灰オリーブ色を呈し、石材は粘板岩か。

3. 第2面の調査（図21、写真18・19）

第1面から0.2~0.3m程掘り下げた鈍い黄橙色細砂礫または砂質シルトの面。検出遺構は溝1条、土坑1基、ピットなど。第1面の掘り残しと思われるピットもあった。弥生時代前期の遺物を含む。

① 溝状遺構（SD）

SD16

南西隅から北東方向に延びる小溝。確認規模は長さ5.6m、幅0.4~0.75m、深さ0.1mを測る。埋土は灰褐色細砂質土である。深さは浅く、遺物包含層の落込みの可能性もあるが、溝状遺構として報告する。

出土遺物（図28・29、写真21） 弥生時代前期の土器少量と磨製石鎌片が出土した。**44**は壺の口縁部1/8片。復元口径10.6cmを測る。器表は摩滅がすすむが、外面丹塗りである。**45**は如意形の口縁を持つ板付I式期の壺口縁部細片。口唇部にヘラによる刻目を施す。調整は外面ヨコナデ。色調は、**44**は外面赤色、**45**は鈍い褐色を呈す。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、**45**は金雲母を含む。

S4は柳葉形の朝鮮式磨製石鎌。先端と茎基部を欠失する。残存長9.5cm、最大幅1.2cmを測る。表

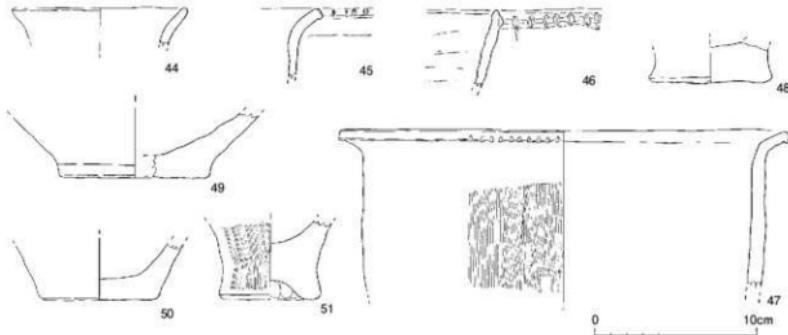


図28 第2面各遺構出土遺物（1/3）

面は研磨仕上げであるが、欠損、傷みが激しい。色調は灰色を呈し、石材は粘板岩である。

② 包含層出土遺物（図28・29、写真21）

弥生時代初めから中期初め頃の土器や黒曜石石鎌、磨石片などが少量出土している。大半は細片である。**46**は刻目突帯文土器口縁部1/6片。調整は板ナデ。口唇部や下にはヘラによる刻目突帯が付く。**47**は如意形の壺口縁から胴部1/6片。復元口径27.6cmを測る。口唇部下端に刻目が付く。調整は、胴部外面はハケ目、口縁部から内面はナデ。色調は**46**は暗褐色、**47**は鈍い褐色を呈す。胎土は**46・47**共2mm内外砂粒が多く含む。**48～51**は壺などの底部。**48**は底径7.6cmを測る。調整はナデ。色調は明赤褐色を呈し、胎土に2mm内外粗砂を多く含み重い。**49**は底部1/2片。復元底径9.2cmを測る。調整は内外面ナデ。**50**は底径7.2cmを測る。器壁はやや摩滅するが調整はナデ。**51**は上げ底である。底径は6.2cmを測る。調整は外面粗いタテハケ、内面ナデ。色調は**48**は明赤褐色、**49～51**は橙色を呈し、胎土は**48～51**のいずれも1～2mmの砂粒を多く含む。

S5は黒曜石の石鎌。基部は無茎である。鎌身長2.5cm、幅2.0cm、最大厚0.7cmを測る。全体に縁辺の調整も含め、雑な作りである。

4. ま と め

今回の調査は横手遺跡群で初めての調査であった。調査では2面の遺構面を確認した。刻目突帯文土器の時期から弥生時代前期の板付IIa式頃の土器を含む下層の第2面と、古墳時代後期末7世紀から中世前期12世紀頃までの第1面である。下層の第2面は包含層と溝、ピットが少数であり、遺構の中心は第1面であった。恐らくこの時期の遺構が遺跡群全域に広がっている可能性がある。今回確認出来なかつたが、横手遺跡群南側の日佐遺跡群では縄文時代後・晚期の遺構（炉跡）や遺物が検出されており、同じ沖積微高地に立地する横手遺跡群でも縄文時代の遺構が確認される可能性がある。第1面は古墳時代後期末から古代前半（7世紀中頃～8世紀）の時期II-1期と中世前期II-2期（12世紀前半頃を中心）の2時期に分けることが出来る。II-1期の遺構はSK11であり、遺物は少ないがSD06、焼土坑SK05なども遺構の切り合い関係から考えてこの時期に入るものと考える。II-2期の遺構はSD09・12である。ピットなども土師器片を含む物もあり多くがこの時期に入るであろう。

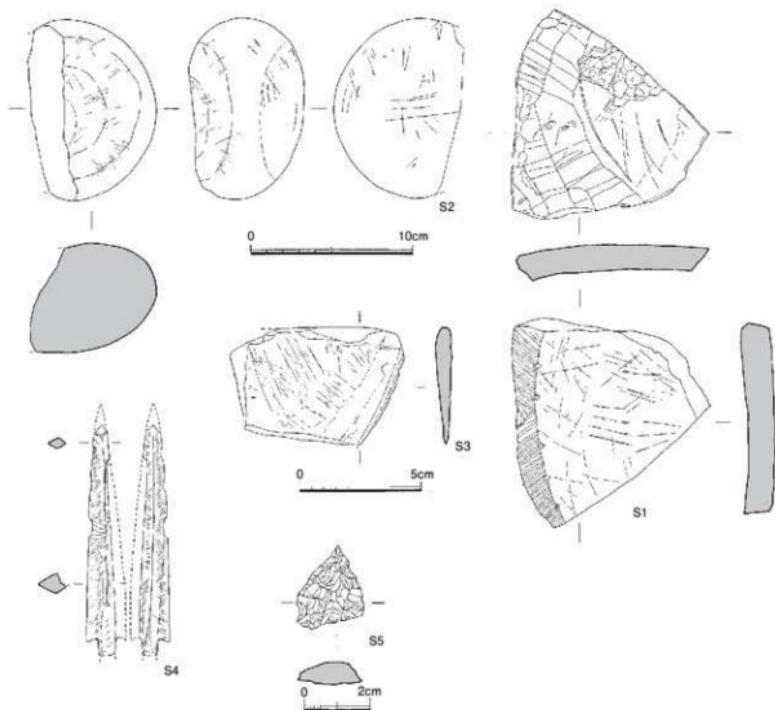


図29 各遺構出土石器 (2/3・1/2・1/3)

調査区東側で検出した南北溝 SD01は時期が土層関係から他遺構よりは比較的新しく、現在の境界に沿っており、江戸時代の編纂資料『筑前國續風土記』の記録にあり、現在も現存する浄土宗の正法寺に関連する溝の可能性がある。

参考文献

- 貝原益軒編 伊藤尾四郎校訂 増補『筑前國續風土記』2001年第四冊 文獻出版
 『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻 2004年初版第1冊 平凡社
 『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告-17-』福岡市埋蔵文化財調査報告第751集 2003 福岡市教育委員会

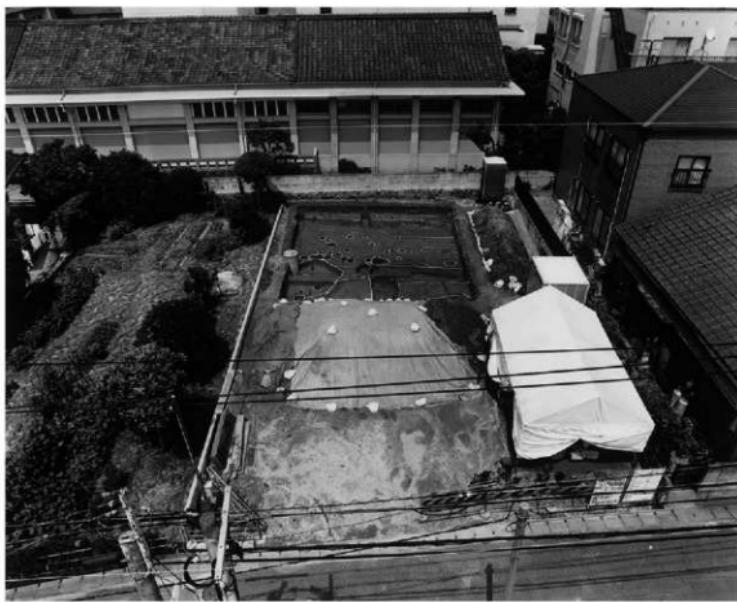


写真9 調査区遠景（西から）

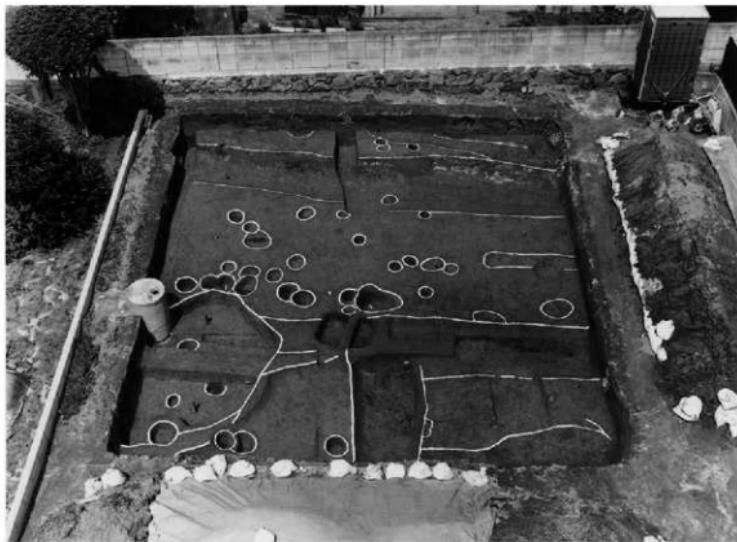


写真10 第1面調査区東側（西から）

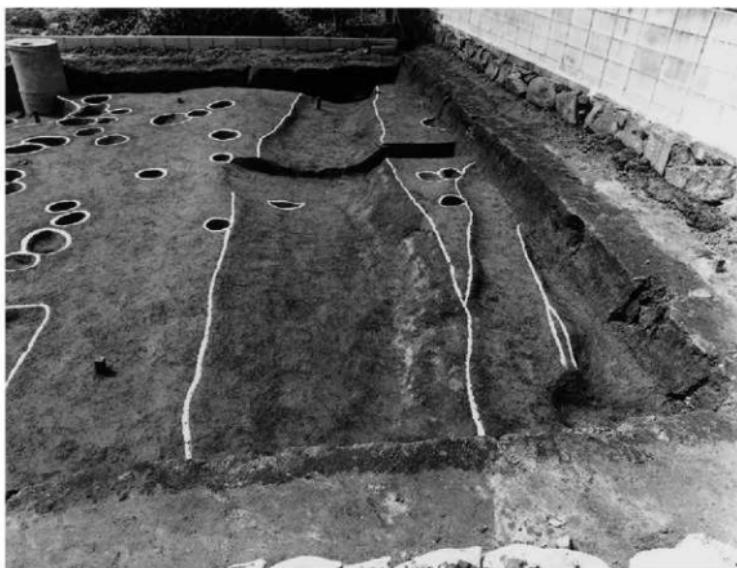


写真11 SD01・02（南から）

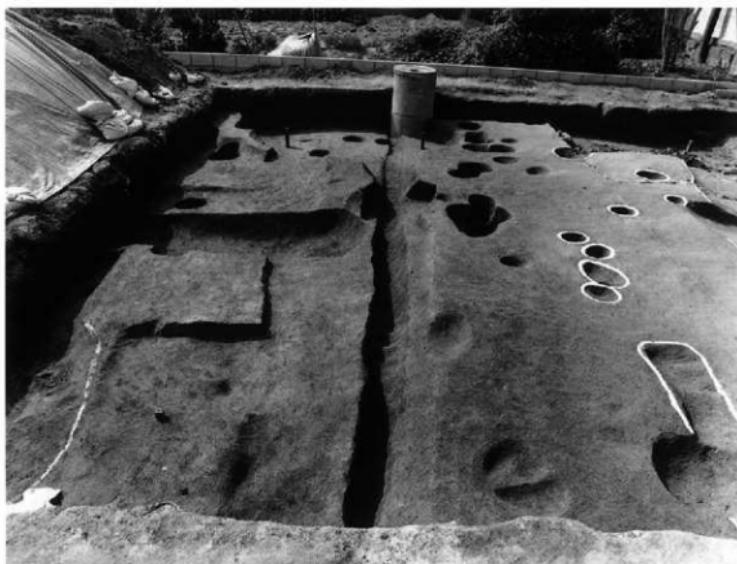


写真12 SD06（南から）



写真13 第1面調査区西側（西から）



写真14 SK05（東から）



写真15 SK04（南東から）



写真16 SD12遺物出土状況（北東から）



写真17 SK11（南から）



写真18 第2面調査区東側（南から）

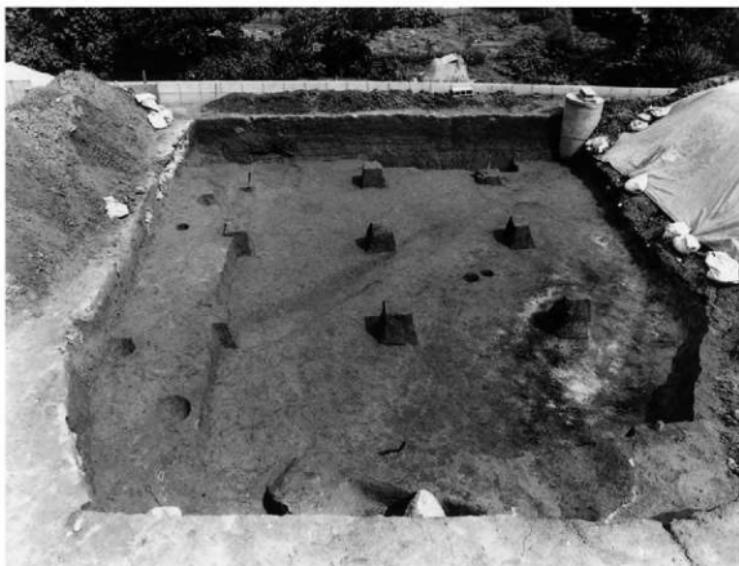


写真19 第2面調査区西側（南から）



写真20 調査区北壁土層 (南から)

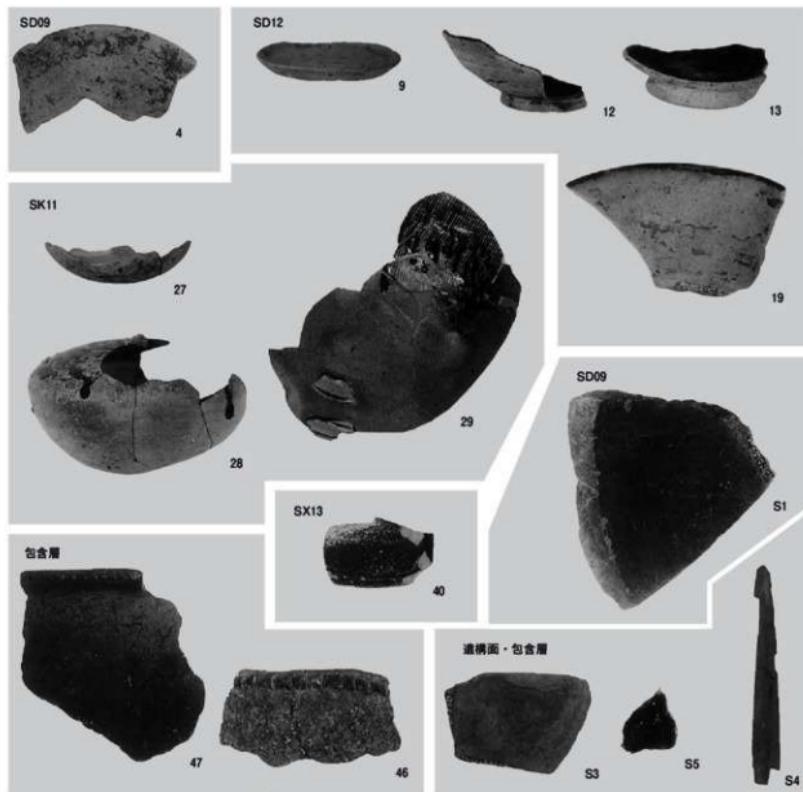


写真21 各遺構出土遺物 (縮尺不統一)

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 卷次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	ちゅうなんぶ 中南部 9 -大橋 E 遺跡第10次調査報告、横手遺跡群第1次調査報告- 9 福岡市埋蔵文化財調査報告書 1015 山崎龍雄 福岡市教育委員会 〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8-1 TEL092-711-4667 2008年3月17日
ふりがな 所収遺跡名 おおはなはいしよせきだ おおはなはいしよせきだ 大橋 E 遺跡 第 10次調査 福岡市南区大橋 4 丁目11-22	ふりがな 所在地 おおはなはいしよせきだ おおはなはいしよせきだ 大橋 E 遺跡 第 10次調査 福岡市南区大橋 4 丁目11-22
よこていでやきぐんだ いちじょうこう 横手遺跡群第 1次調査 福岡市南区横手 3 丁目273番 6	コード 市町村 遺跡番号 40132 2382 33°33'19" 北緯 東經 130°25'30" 調査期間 20040202 ~20040227 233 個人住宅 建設
所収遺跡名 大橋 E 遺跡第 10次調査	主な時代 中世後期、近世 主な遺構 中世-溝+土坑+柱穴/近世以降-溝+土坑+井戸
横手遺跡群第 1次調査	主な時代 弥生時代、古墳時代、中世 主な遺物 弥生時代-溝+包含層/古墳時代-土坑/中世-溝+土坑+柱穴
要約	大橋 E 遺跡第10次調査 戦国時代の館と思われる溝のコーナー部分と近世後期の原敷地の一部を確認した。 調査地の西側丘陵部には古野城があり、調査地の字名が矢头であることから古野城に隣接する館であった可能性がある。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1015集

中南部 9

-大橋 E 遺跡第10次調査報告、横手遺跡群第1次調査報告-

2008年（平成20年）3月17日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 新文交社印刷

福岡市中央区地行 1 丁目11番 3 号